女學雜誌

一冊六錢

各土曜日發兌

第百九拾八號

當府內無郵稅

郵稅五厘

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 198. 1st February. 1890.

EDITORIAL :—Adultery and Fornication (*continued*).

LEADING ARTICLE :—Literary Criticism.

CRITICAL NOTES:—On Reading "Shōnan-Iko." The 7th Number of "Shincho-Hyakushi."

MISCELLANEOUS :—On hearing Yencho's Tale. Dr. Nieshima's Burial. Immoral People ought to be Silent. The Chimney. Mournful Reminiscence at Oiso.

NOVEL :—The Story of Innac Ardene.

CONTRIBUTED ARTICLE :—Dr. Nieshima's Teaching on his death-bed (Mrs. Sasaki).

OPEN LETTERS :—

NOTES ON THE NEWEST ISSUES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

SINCE OUR LAST ISSUE.

第百九十八號目錄

社説 姦淫論

論説 文學上批評の性質を論ず

批評 小楠遺稿○新著百種第七號を評す

雜錄 圓朝が落語を聞く○梅に月茶さへも入らぬ夜なりけり○ストーブの烟出し○大磯涙の記○新島襄先生送葬○朝起の必要○茶話

小説 イナック、アーデン物語

寄書 新島襄先生の遺訓(佐々城豐壽)

開書 願ふ事四條(井上よし)○全國各婦人會に告け參らす○古著百種休刊につきまして○交詢

時事 女子參政權○月次御兼題○太平閑人○今后の同志社大學○貧民及安息日○名醫十八人○廢娼論説○廢娼論料

女報 豐田英雄女史○產婆へ諭示○鹿島英語學校女子部○女學校生徒特遇を受く○清流女學校○清水豐子の運動○名古屋の女學校○藝妓放逐の協議○女子講習會

Women in Japan.

(1) *Countess Okuma recently addressed a letter to Dr. Takagi, President of the Tokyo Charity Hospital, acknowledging with sincere gratitude, the untiring patience and kind efforts shown by those trained nurses from the Hospital, who attended the Count during his confinement to bed after he was severely wounded by the assassin. She gave five hundred yen to the Hospital Fund, and expressed her wish that the Hospital will continue to train up many more of such nurses.*

(2) *Some Christian women at Nagoya are said to have determined, with the consent of Christians of all the denominations in that city, to undertake the movement of abolition of licensed prostitution, as well as the elevation of moral standard of women in that city.*

(3) *We have hinted again and again on the advisability of training girls, in short-hand writing. Since the beginning of this term, short-hand is taught by Mr. Tsukuda in the Meiji Jo-Gakko to a class of some thirty girls who specially wish to be instructed in the same.*

(4) *On the 7th ult. Mr. Iwamoto delivered a lecture concerning the need of abolition of prostitution at Mishima, to some 300 audience. After the meeting was over, Messrs Tsuda and Iwamoto saw a man who is a brothel keeper there, and when they talked with him on the subject of abolition, he replied that, as he has long been thinking of changing his occupation, he would assuredly change it within this year. There are in the town of Mishima about 1600 houses, 14 of which are prostitute houses, having 22 prostitutes in all.*

(5) *We report with unspeakable sorrow the death of Rev. Dr. J. Nieshima of Kioto at Oiso on the 23rd ult.*

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

新島襄先生肖像

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌　第百九十八號
明治二十三年二月一日發兌

社説

○姦淫論

男女夫妻（下）

析儒ベーコンは言へり、人は總べて朋友あらんことを求め、朋友は總べて己に均しからんことを求むと、蓋し己に均しき者にあらねバ打くつろぎて相和らぐことを得ず、親しみは窮屈遠慮の間だに生ぜざればなり、眞の愛に懼れあることなし、懼れを懐くの愛は一は尊重に流れ他は憫愍に歸す、未だ眞誠の愛情を盡くすものと云ふことを得ず。

世話に云く、旅は道づれと、利害相關せず、見たると嘗て無き路人が、乍まちにして意氣投合し、坐ろに情けを動かして信切一と方ならぬものは、景光寂然、四方總じて淒涼たるの旅行に、特り向ふ所ろを同ふするの友を得たればなるべし、來るもの必らずしも鬼あらず、往くもの何んぞ悉とく天使あらんや、左れど我と方向を一つにするものゝ何となく慕わしく、我に逆らつて來るものゝ自づから疑はし氣なるは、他なし同方向の人は我が行んとする所ろに向ひ若しくは近づくの人ありと知らるゝが爲なり。

假初めの道連れも尙ほ斯許りに慕わしく、偶街の友人も心合するときは斯の如くに戀ひしきなり、況んや終身の友、一生の同伴者たるものに至りては、其戀ひしく慕はしきこと抑そも何如許りにてやあらん、夫婦の間則はち是れ也。

世に二人相均しきものなし、社會に於ては身分段階あるもの存し、彼と我とを尊卑上下に差等す、學校に於ては級席の不同あり、官海に於ては爵位の高下あり、世上に於ては貧富長幼貴賤先后の別あり、到る處ろに二人並び立ち總べて同等なるものあらず、家に入るも尙ほ然り、父は子の上に立ち、子は父の下に伏し、兄は弟の上に、妹は姉の下に、主人は僕の上に、老父母は老翁嫗の下に列す、和樂團欒の室家なりと云へども家人個々の地位に於て尙ほ幾分の不平等なき能わず、此に於てか一方に敬意あり恭意あると共に、他方に慈恩憫情を存す、其間未だ平等極眞の正愛を起すに至らず、況んや彼の社會世上の間柄に於ては、優劣尊卑寧ろ或は凌ぐとあるべし爲に一視同仁の愛を出して彼此の別を削るが如はいよ〳〵望み得がたきの事とす。但だ夫れ夫妻か、眞とに能く平等にして互ひに尊卑あることなく、二身相合して一躰を爲し、表裏

剛柔相和して共に一つの完きを造る、地位に於て優り劣るとなく、權力に於て重んじ輕んずるの差あるとなし、即はち眞誠の均一を得て、懼れなきの愛初めて玆に伸び、人間に於て得らるべき最高最熱の情大に結ぶ。

特に父母兄弟姉妹と云へども、常に其志を同じくするとを得ず、父の爲す所ろ子三年之を改めずと云へども三年を過すときは何如の孝子も尙ほ之を改むるとあり、况んや兄の弟に於ける、姉の妹に於ける、若くは弟妹の其兄姉に於ける如き、皆な一々に志望方向を異にす、彼等互に愛し終生事を共にせんとするも勢ひ然あるとを許さず、兄は吳に征き、弟は蜀に仕へ、梅松櫻各々歸する所を異にし、源平姉妹を分つの古事如今尙ほ類々として多し、吾人之を思ふときは親子同胞の爲めに泣かずんばあらず、然れども夫妻は即はち終身の同伴者にして偕老相分るゝとなし、情の密なる所以自ら故ありと云ふべし、若し一里の路人にして尙ほ其連を慕ふと云はゞ、夫婦身を終るの同伴に至つては夫れ將た何等の慕はしきとぞある。

左れば夫婦は相ひ愛する者の中に於て特に尤も深く相愛するものあり、相ひ慕ふものゝ中に於て特に尤も深く相慕ふものあり、其愛慕は只た徒らに起るにあらず眞とに其起るべき由緣あり、故に彼等は極めて切に相愛慕するとの尋常にてあるのみあらず當に然か愛慕すべきものたり、其の如此なるは天の命にして亦た天の許しなり、天の命は則はち此に賦する所ろにして彼等をして其の全きに至らしむるの道たり、故に彼等如此く相愛慕するは其義務にして且つ天則たり、此の義務を盡して初めて天の定る所ろを得、蓋し如此ならずんば人間の美を盡すとを得ざるものあり、則はち知る、夫婦は朋友中の一層の朋友、家族中の一層の家族ありと。

家族の人に於ける影響を知らば夫婦の影響の更に切あるとを知るべし、朋友の人に於ける感化を知らば夫婦の感化の更に深きとを知るべし、ベーコン曰く朋友なきの人は禽獸に近しと、朋友にして既に然るとを知らば朋友中の朋友とも云ふべき夫婦にしてもし其眞なるものなくんば抑そも之を何如にと評すべき、スマイルス又曰くホーム(眞室家)なき所ろに善者あるなしと、室家にして既に然るとを知らば家族中の家族とも云ふべき夫婦にして若し眞正あらずんば抑そも亦た之を何如にと云ふべき哉。

英雄にして初めて英雄を知るとを得、淸き心ありて初めて淸

きの神を認むることを得、大凡そ世上の純潔なるもの、美麗なるもの、至愛なるものは、亦た心のきよく美くしき愛深き輩らにのみ確認せらるゝことを得、苟くも然らず、心汚れ情ねぢけたらんものは、たとひ宇宙の美天地に圓滿し神の愛六合に溢るゝと云へども、其の之に感ぜざると恰かも寒鳥の枯木に宿して互に通ぜず、流水の落花を載せて情の知るなきが如けん、左れば人をして能く此の如き妙なる感通を得せしめんとするには先づ其心を純潔にし、美麗にし、至愛にするを要す、而して之を如此くするの要は實に男女淸く交はり夫妻潔よく愛するを以て其根本となす。思ふに天の男女を判ち剛柔の性を別賦すると極深の妙理を存するが如し、男女もし極めて正しく交わるときは之よりして總べての善德を湧起し來る、其交はり若し不潔なるときは總べての惡德を誘ない來る、正しければ善靈いよ〳〵伸び、正しからざれば惡情益々猛ける、人の化して天使の如くなり若くは落ちて禽獸の如くなるの差別只だ此の一點左右の分界に存す、左れば男女淸德を踏み、夫妻至潔至愛にして初めてよく人情の最純最美なるものを伸し、此の純美の情いよ〳〵天地の粹を感悟吸入して益す性格を高め遂に万界の靈長となる。

國家治亂盛衰の根元

夫れ國は家より成り、家は夫婦より初まる、夫婦間の交際何如んは、第一其の人格品性を高下するに足り、第二室家の幸不幸和不和を分つに足る。而して室家の幸不幸は、更に人を善良にし若くは醜惡にするの大相違を來し、此等人物の善惡醜美に別るゝ所ろは則はち一國治亂盛衰の基めを起す。左れば、國家治亂進退の基ひは家にあり、而して家の基ひは夫妻にあり、夫妻の初めは男女にあるが故に、男女間の淸濁何如んは遂に滿天下の大勢に影響す、關はる所ろ洪大無量なりと云ふべし、古聖の深く男女の間だに掛念せらるゝは實に此の要理存するが故なり。

大罪惡

夫れ姦淫とは即ち男女間の淸からざるを云ふ也、男女未だ婚嫁せずして相通ずるは即ち姦淫なり、有夫の妻、有妻の夫他に通ずるは即ち姦淫なり、此等の姦淫は總べて同一の大罪惡なり、何んぞ只だ此れのみならん、總じて如此き姦淫に導き遂に其惡に至らしむるの不潔は皆悉とく姦淫たるなり、我なんぢ等に告げん、凡そ他を見て色情を起すものは中心既でに姦淫したるなり、若し右の眼汝を罪に落さば抉出だして之を

棄よ、五體の一を失ふは全身を地獄に投入るよりも勝れり。何をか罪と云ふ、道に背き德を廢し、一身を傷つけ他を害するの惡行を之れ云ふにあらずや、然らば斯く我が靈を陷いれ身を殺し家を破り國を害する姦淫の如きものは即はち罪中の尤も大罪なるものにあらずや。

世人未だ切に姦淫の罪たるとを思はず、何んとなれば世は既に其罪谷に常住し、生平日夜姦淫の空氣を呼吸するがゆへ也、世人もし俗見凡心を懷きて低くゝ考ふるときは一の悟發する所ろあらざるべし、先づ天を見、默想して大道を念ひ、豁として新鮮の氣を大引せよ、當に釋然として悟り、姦淫の極めて惡むべきとを覺了すべし。

姦淫公許

妓樓公許は姦淫の公許にあらずや、姦淫公許は姦淫の保護にあらずや、姦淫保護は遂に姦淫の獎勵にあらずや、姦淫を公許し保護し獎勵すると極めて驚ろくべし、然れども之を保護獎勵しつゝ風儀の嚴肅化善せんとを望むに至つては幾歎何も及ぶとなし、世人先づ姦淫公許の害惡如何に濃密にして其毒氣の國家人々に蝕入する如何に沈深なるかを見よ、廢娼論を決するに於て將に猛然悚感するとあらんとす。

論說

○文學士上批評の性質を論ず

梠村居士

誰れか花月風雲相善からずと言ふや、花月の賞すべきもの吾僚風雲を須つて始めて之を知るなり、若し夫れ、花常に爛々月常に瓏々たらば豈に一片趣味の掬すべきものあらんや、夫れ當代の日本は文學世界の戰國なり淡調あり和調あり歐調あり、而して和調又古今數多の分派を生じ、紛亂錯雜法度亂れ規律廢れ、一定の大綱を擧げて之を綜治せんと得て能ふべきに非ず日本文學特有の趣味は殆んど那邊に存するやを知るべからざるなり、斯る時代に當りて倩ら〳〵當今文學者と稱するものゝ爲す所を見るに悲哉彼等は殆んど皆な虛名を貪ぼり射利に傾きて大文學の統一を計らず區々たる鄙猥小說の末技に耽りて大說の能く天下萬衆の迷夢を攪破し以て我邦文學の特所を發揚せんとするものあるなし之れ必ずや諸種の原因によりて生出し來れるものに相違なかるべきも、其重要なるものに至りては實に之れが伴侶たり反影たるべき批評の不完全に歸せざるべからず、試に今日英文學の光輝能く宇內に赫炳たるを得るもの一にエリザベス時代の文學に胚胎起因せるものあるとを想へ、又試みに其所謂エリザベス時代の文學なる

者は悉も今日我邦文學社會の現況に異ならざりしを思へ、抑も英語なるものは素とセルチック、サキソン、スカレヂ子ツイアン、ノーマン（希臘及羅典）の四語合躰混淆せるものに外ならず然るに此時代に於ては更に濁潮流注し佛瀾闖入して忽ち文海の大狂濤を起し文學者は孰れも眉を蹙めて其成り行きを氣遣ひたりしが其一大紛亂中に超然卓拔して能く之を統轄すべきの大文豪は先づエドマンド、スペンサー出でゝ「フエアリー、クイン」に其名を轟かし同時にウイリアム、セキスピア出でゝ一萬五千餘の異語を用ひて幾多の悲劇を作りしを初めとし次でベーコン出でミルトン出でジヨンソン出で遂に今日の盛を致すに至れり其能く然るを得たりしもの元より此等諸大家の力與ッて大なりしあるべしと雖も吾僚は彼少壯なるフイリツプ、シドニー一篇の批評書が此等文學者の腦底を刺衝せると最も大ありしを揚言せずんばあらず左れば我邦の今日と雖も之れが評論批議にして完全至公なるとを得ば大哲出で文豪顯はれ帝國文學の光輝燦爛として宇内に雄視すべきと期して待つべきなり、然らば則ち其所謂批評とはそも何事を云ふか、將た、如何して完全なる批評を作り得べきか是れ吾僚が之より論ぜんと欲する所のものなり。

何をか批評と云ふ曰く批評とは人爲の事物に對し是非の見解を下すを云ふなり文學上の批評と雖も其性質に於ては敢て之に外なるなし唯其批評さるべき物躰の文學上の事物に限るの一點異なれるのみ思ふに人各生れながらにして己れの足らざるを補ゐ己れの非なるを矯めて成るべく完全圓滿に近づかんとするの心あり此心有て何全く補足矯正し能はざる所以のもの是れ實に各人己れを偏尊するの眼あるも至當公正に己れの是非を判する能はざるに非ずんばあらず果して然らば局外者の批評を求めて己れを責むるも亦已むを得ざるに出づるものと云ふべし去れば批評の目的は常に被評者をして其是非を知らしめ惡を矯め善を養はしむるの意志を以てなさゞるべからず、被評者外の人をして或は之に傚ひ、或は之れが覆轍を蹈まざらしむるの覺悟を以てなさゞるべからず、若し否らずして徒らに他を罵しり己れを贊して得々たること彼のヴイカー、オヴ、ウエークフイールドの中に叙せるジヨージをして「敵を罵しり友を賞む余は敵なく友なきを以て文學社會の批評は一も余の著書の上に來るものなし」と言はしむるが如きに至ては啻に之を適當の批評と云ふべからざるのみならず吾僚は斷じて之を文學社會を荼毒すべき無益の漫言ありと言

はんとす。

批評の性質は大要以上に說述せるが如しと雖も凡そ事物を是非するもの必ずしも皆な批評なりと速斷すべからず批評亦自から批評に關する原理原則有つて存す、故に今之を分解的に論述すれば先づ批評には二個の必要なる條件を具備せざるべからず曰く批評さるべき物躰曰く批評すべき人則ち之れなり文學上の批評に於ては前者は詩歌散文の類を云ひ後者は之を褒貶するものを云ふ逐次左に之を概論すべし。

第一批評さるべき物躰 に就ては別に論ずべきものなしと雖も獨り注意すべきは「人爲の事物に對すると」「他人の爲せる事物に限ると」之なり第一人爲の事物に限るてふとは「天然の事物は評するとも矯正し能はず助長し能はざるの理由に基くなり左れども凡そ批評するものは獨り被評者一個人の爲めにするものに非ずして廣く世人一般の爲めに謀るものなれば天然の事物と雖も評して益なしと云ふべからずと云ふものもあらん、然れども是れ一を知て未だ二を知らざるもの丶言と謂ふべし何となれば天然の事物を批評するは全く一種の學術に屬し最早批評の範域を超脫したるものあればなり、若し之をしも批評と見做さば宇宙万有の原理は孰れも批評なりと云はざるべからず吾儕が茲に所謂批評なるものは豈にしかく廣博の意義を有するものならんや第二他人の爲せる事物に限るべきは元より論を待たず前來論述する所を見るも明かに然るを知り得べし、然れども客臘發兌の小文學第四號を見れば其鐵桃欄內に於て近頃自著自評の痴漢あると」を喝破したり、然らば世間倘此原理を知らざるものあるに似たり己れ己れを評して適當に評し得べしとせば始めより評せざるに如かず徒らに己れを讃するは寸毛の利益を文學社會に與へざるなり、世往々自評と稱するものあるを見れども之れ唯ゞ其名のみ批評にして其實註釋の一種たるに過ぎず。

第二批評すべき人 に關しては諸種の要件を注意せざるべからず蓋し批評の源泉は批評家の一盲に在るを以て批評家は重きを己れに置き、細心熟慮以て事物の進步を謀らざるべからず左れども批評家必ずしも神聖にあらねば其言ふ所ろ亦自ら衝突あり精疎あり粗鹵あり偏頗あるを免かれざるべし身自ら公平を以て誇れるマコーレー卿と雖もサッカレーは之を排斥して偏頗甚だしと論じたるに非ずや批評の至難なる推して知るべきのみ、吾儕は先づ批評家に向つて望まんとす。第一公平の心あらんとを。是れ最とも解し易くして而かも尙ほ最も行

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

なひ難き原則なり先入の遲速交際の有無の如きは重要なる妨害物たり、吾儕は今日屢々敵意を狹むで漫罵し私情に流れて溢美するものあるを見得るあり、元來事物の是非なるものは多少筆舌の才ある者に取ては輙すく黑白異同し得べきが故に正否の判斷は分厘の私情を挾まざるを要す某雜誌殊に此弊あり。第二敏捷、奇警、精細の眼あらんとを。批評如何に公正不偏なりとも評者にして此等の眼光なくんば其事物を一見して直に之を分解し總合し以て其隱微を發見し其衝突を看破することを得ず、隨て其批評は露ほども矯正補足の効を有せざるのみか徒に被評者を慢心せしむるか失望せしむるの二途あるべきのみ斯る批評は其害全くなきよりも甚だし。第三、被評者に均しき又は優れる學識あらんとを。若し然らずして其學劣る所あらば見解多く正鵠を誤まり一盲評たるに止まらんのみ恰かも幽玄なる眞理は不完全なる人類によりて探究され能はざるが如し、然れども吾儕は決して伎倆の優劣有無を問ふものに非ず伎倆自ら學識と異なり、批評の原料としてしかく有力なるものに非ればなり、現に……居士の如き吾儕は其著の小說中一も感服せるものなしと雖も其批評に至りては駸々肯綮に中り吾儕をして轉た其精細奇警なる眼光に服せしむるものあるを見ても知るべし。

以上の二件五則にして完からば、希庶くは批評の完きを得べけんか倘之を外にして、批評の歷史、批評の種類等論ずべきと少なからずと雖も吾儕學なく識なくして焉んぞ深遠の大理を知るを得ん、此篇と雖も、日夜恐々として其誤りなきやを氣遣ふなり、故に暫らく玆に筆を擱き敢て世間有識諸君の教を乞はんとす、又敢て大方批評家諸君の注意を喚起せんとす、吾儕が說く所ろ、頗る我邦文學者を罵しるに似たりと雖も、吾儕一片の丹心大に其前途を冀へしむる所あればなり若し夫れ今日は我邦文學の統一を計畫すべき大文豪が筆端の伎倆を顯はすべき最大好機なるとを思はゞ吾儕の此言も亦風雲の花月に於けるが如くならざるを知らんや。

批評

○小楠遺稿　　撫象子

小楠遺稿は横井小楠先生の遺稿にして、嫡子時雄君之を編輯し、猶子德富猪一郎君の朋之を民友社に於て發兌せり、質實優雅なる一大美本にして頁數五百四十葉に超え、章を雜著、建白、書翰、講義、文、詩、遊學雜誌、遊歷見聞書の八に分ち、

別に中根雪江氏の口錄、元田永孚氏の語錄を添へ、側面より先生の思想勢力を窺ひ知らしむ。

先生在るの當時、天下俊傑少なしとせず、佐久間象山、藤田東湖の如き其の尤も秀でたるものなり、然るに東湖は意を以て勝れ、象山は智を以て優れり、其の德を以て大に純熟したるものは即ち先生にして、而も且つ意智凡ならず、蓋し當世第一の偉人なり、俚言推尊して肥后聖人と云へる者眞に當れり。

今ま其遺稿を通讀するに、當世局蹙たる細儒迂學者の見識を拔く万丈の觀あり、素と伊洛を宗とし遡つて孔孟を信じ直ちに堯舜を祖述し、厚く天を敬し誠忠を重んじ、家國天下の道悉とく一心に歸して一心を直くするの要たゞ良心を發揮するにありと云ふ、之を以て其の子弟を敎ゆるや專ぱら靈能を開發す、其の越公を輔くるや先づ將軍の上洛謝罪を先務とす、其開鎖を論ずるや天下皆朋たり暴りに交を防ぐの理なしと斷ず、平生浮文迂學を退ぞけ慨然として帝王の師を以て任じ、私かに孔明の德を慕ひ、且つ重盛、正行の義忠を重んず、文久元治より慶應明治に移るの交、天下紛々として道德の基礎定まるなし、氣慨あるものは道を輕んじ、道を講ずるものは小廉細謹に僻して用を爲さず、但よく正大堂々として滿腹天下の經濟策を藏むるの人傑に至ては獨先生を推すべし。

學校問答に云く、

和漢古今明君出給ひては必先づ學校を興し給ふとにて候然るに其跡に就て見候に學校にて出類の人才出候ためし無之……學政一致と申す心は人才を生育し政事の有用に用ひんとの心にて候此政事の有用に用ひんとの心直樣一統にとをり候と諸生孰れも有用の人才に成らんと競立ち若實爲己の本を忘れ政事運用の末に馳込み其弊互に忌諱媢疾を生ず

文武一途の說に云く、

孔子孟子の時に用られ玉はゞ天下の亂臣賊子を誅し四海の叛亂を平らげいかめしき業思ひやられ侍る朱子曰く有豪傑而不聖賢、未有聖賢而不豪傑、……道は體用本末文武一途に行るゝに非れば眞の道とは云ふ可らず苟も眞正の道を學び天下國家の大要を抱くものは仁義忠誠の心術を磨き一點氣血の麁暴に馳せず小心謹畏深く事を慮り必ず中正至當の理を得んと欲するは固より申に及ばず……所云る眞正の大英雄人とは武侯朱子の外に又誰かありとぞ稱すべきや

夷虜應接大意に云く、

亞非利加魯士亞の使節に應接するも只此天地仁義の大道を貫くの條理を得るに在り……我國に信義を失なはざるのみならず自餘の國にも又信義を守り侵犯黜惡の所行なく天地の心に背かざるの國ありて我に通信交易を望むに我是を絕て拒絕するの道理あるべきや……戰の勝敗は砲熕器械のみにあらずして正義の天地に貫と不貫と人心の振と不振とにあり……

強兵論に云く、

加藤清正の大十文字本多忠勝主の蜻蜓切師傳ありて修行せられしと云ふとも聞かざれど一心の鍛練より發して先登陷陣八面無敵……皆武道の致す所にして武術の所爲にあらざるを見るべし……北條房州小幡景憲の兵理を說く專ら經綸に任じて行伍進退に止らず柳生但州の猷廟に事へて大政に參預し宮本武藏の細川家に賓師として國事を謀りし如き皆一時の人材俊傑にして后世の兵家武人を以て稱する類に非ず……三代の學校の大意は總て德性の固有に本づき人の人たる職分を盡さしむるまでにて一つとして強爲に亘るとなし……

國是十二條、壁書七條に云く、

不關天下之治亂一國以擬立爲本（自然の天理に則り自然の人事を盡し利害得喪一說變外に付す此の大條理明なれば吉凶禍福凡そ外事の變態人心を動すに足らず其理に隨て順應の信義をして天下に明かならんとを欲す。戰爭の慘怛万民の疲弊之を思ひ又思ひ更に見聞に求れば自然に良心を發すべし。

其の徒らに慷慨するを非とするの書に云く

惣じて正大明白と申も眞僞二つ有て世の所云る慷慨者抔は唯一偏に事を爲さんと欲し無理有理をわきまへずして只管ら其事を遂げ得んと懸り候は是れ其人不見識なるのみならず其心術重に功名の上に馳候て義理正大の筋を表に押立候計にて事にそ替れ戰國山師者共と同樣の輩……水府の君臣人傑の天授に候得共如此心術の曲は必竟學問の偏所より出候事……是は例の水府の智術にて進退困窮に見を懸け候て天下有志者の責をのがれ申所にして是則ち心術の御誠意の立申不所と奉存候此隱微に至候而者天下の有志者恐らくは見破申間敷水府の術中に落入罷在候は殘念に奉存候……天下の人才愛せられ候も只御使令被成度御心に出申候。

米國留學の砌二人に與ふる書に云く、
申迄も無之候え共木石をも動かし候は誠心のみなれば躬する時も誠心を養ひうれしき時も誠心を養ひ何も誠心の一途に自ず被致度候是唯今日遊學中の心得と申にて無之如此修勵被成候えば終身の學中今日に有之航海の藝業世界第一の人に成り候よりも芽出度かるべし。

沼山閑話に云く、
堯舜三代の心を用ゆるを見るに其天を畏るゝ事現在天帝の上に在せる如く目に視耳に聞く動揺周旋總て天帝の命を受る如く自然に敬畏なり。

其識見の最も秀逸非凡なるを陳平論となす、云く、
陳平初めより高祖を助け天下の塗炭を救はんと思立しにも非ず唯時の會に乘じて巧智を以て富貴を取しもの也高祖をして功臣を猜忌するの名を受しめ諸功臣をして終に全ふするとを得ざらしめ呂后の權威をして强大ならしめしも皆陳平の方寸より出たり……今より想像するに當時陳平一人朝廷に在て機智を巧にせしゆゑ滿朝の士太夫自然に氣味の揺しくなり皆々身用心をいたし前后を見合せ易簡正大の風は日に薄く成行しと見えたりされども其形跡を顯はさぬゆゑ姿より見れば餘程世用に立つ人と思はるゝなり其隱謀詭秘にして隱映出沒測るべからず。

熊府を發して東遊するの詩に、
目送飛鷹搏二万里一拂二披雙翼一已離レ群。
の句あり、亦寓言五首に有之、云く

智唯在レ擇レ善、擇レ善即執レ中、何以執二其中一、方寸一字公。
衆言恐二正議一、正議惱二衆言一、二者名利耳、別有二天理存一。
旣非二衆與一レ正、天理何所求、一生和同意、忽乘二子莫舟一。
彼是又非レ此、是非一方偏、姑置二是非心一、心虛即見レ天。
心虛即見レ天、天理万物和、紛々閑是非、一笑付二遊波一。

題二虞美人一
豈勿レ懷二春情一、蹔戒隨二俳言一、愛他行路露、自重潔麗魂。

嗚呼此等の思想何んぞ俗見を去るとの高遠至清なる、先生にして維新后久しく存せば、我國今日の道德恐らくは今の如くあらじ、后人たゞ其遺稿によりて感化を蒙むる恨み幾千ぞや、然れども先生又云へるとあり、
孔孟を學んと思ひなば孔孟の學ぶ處如何んと思ふべし左なくば孔孟の奴隷なりと。
吾人先生を追慕するものは亦た先生の學ぶ所ろを學ぶべし、

而して先生の學ぶ所ろは三代堯舜の道にして主要、上帝を敬し、良心を發揮し、博く人を愛するにあり、先生もし今まあらば、蓋し吾人と學を同ふするの人なり。

○新著百種第七號を評す

熊谷にて　盲目仙人しるす

世間何が面白いとて、小説より面白きはなく、小説何かと問はゞ、まつ新著百種と答へん、忘れもせじ過ぎし夏、家に喪ありて、故郷に在りし時、見舞にとて友達より送りこせしが、戀ならぬ抑も〳〵、寐ても醒ても忘られぬは是れぞ、さらぬだに、紅葉の手に珠數爪繰り、妙なる聲の普門品には、三七日の看經より有難く、露伴ふ軒に鬢磨きすまして、一念發體の女菩薩には、高僧知識の供養にも、優〆思ひのするを、増して美麗しき妹背貝に、乙女が愛度氣なき心の通へは、珍らしき堀出し物には、風雅に物數寄の娘と勇さむべしや、されは東籬の霜冴えて、殘菊薫る朝にも、一杯の松花に心長閑けく、樂しむ風流人もあらざらんや、さても床しきは新著百種、今時の文學海、流行より流行に、寄邊定めなき世の中乍ら、唐に倭の文を捨てれば、粋に内外の新舊をも撰ばず、皆な其れ〳〵の長處を取りて、紙に時ならぬ花を散し、百種百色の香り放ちて、洛陽の紙價すんと高ければ、思ひし事の一入懐しく、次に發兌の名さへ知らでいつしか雜誌屋の軒に遅きを嘆つも抑も我のみの物數寄にあらざるを知れや。

第七號は誰あらふ、兼て都の花新小説等にて、見物を驚かせ、今關西に旗頭と仰れて、文壇に飛鳥も落つべく勢ある宮崎三昧道人、此人の筆と聞いては、何もなふ一入懐かしき心地のせらるゝに、澄み入る月に松影のかう寂びたる、表紙を見るさへ物鬱き塵の浮世を離れて、世を宇治山の草の爐に、なら茶三石の由縁にもや、嘸ぞや嘸ぞかしも取る手もどかしく、繙き見るに、餘りの事に見劣りのせらるゝに驚きぬ、されど名ある道人の筆、それ迄に惡からふ筈はなく、諺に謂ふ猫に小判、雅言俗耳に知入られぬ故にもや、然るを心附かで論らいせんは、心耻しき限りなれば、先づ心ろ得られぬ節々、申し見んに教へ給へや三昧道人。

趣向　先づ卷頭より數へ見れば、涅槃會の喧嘩壯士が救ひにさめこ姫危難を免る事、交誼を需めて義燕婚儀を謀る事、禍ひの來るを察して清虚齋父子家を走る事、等是等の趣向は、馬琴京傳類の小説を讀む者、一見眼に入る事のみなれば、今更らに陳套斬新の差別にも及ばず、殊に相生太郎が舊師を尋ねて、圖らず清虚齋に邂逅する處に局を結びし如きは、實に拙中の拙とも云ふべきや、兎に角に新著百種向の代物とせられし、作者の存意こそ知れ難しとまで一時は感じぬ。

されども、抑も作者の意匠は、啻に斯く表面のみにあるにはあらじと思ひば、又熟〳〵と考ひたりしに、果して爰に一點の、潜伏せるものあるを感じたり、其は外ならず、本篇幾種の人物、一として清虚齋の眼膣より出でざるは無く、義燕主從の痴愚、相生太郎の義膽、さめこ姫の武勇、皆盡く清虚齋が藥籠中の一物ならざるは無く、一部松花録、圓滿なる主人公、超凡なる立案、當世向きの實際派が思ひも寄らぬ處、中々に輕々看過すべきにあらず、爰果して松花録の松花録たる處あるか、然れども、凡そ此樣の圓滿ある人物、神代秡馬の沙汰は知られど、人の精神には、新舊古今の變りある筈ならねば、何時の世にも有るべき樣なし、作者那邊より悟入せられしか、何はしかれ、平素實際のみを旨として、合卷人情躰と泛目されし作者斯る理想に立入られしは、近頃珍らしき一ツと言はまし、次に文躰、道人の文章は、專ら流暢穩雅の筆を以て、世態人情を描寫する、平調の一派となすものゝ、然るに爰に訝かしきは本篇の文躰、平素の筆法は何地へ往きしか、筆力の粗亂、言語の不調和、作者の作乍ら、追羽子蜉蝣の屁物語にも比ぶべくもあらず、作者如何にか爲し給へしぞ、評者嘗て寶暦前後の小説を見たる事有りしが、思へば是れも相似たる文章なきにあらず、知らず作者の或は習らひ見給ひしにや、今頃の流行の世の中、摸倣も又一興あれど、矢張り野に置け蓮華草、古躰は矢張り古物にこそ味あれ、殊更に摸倣なんどは、有難き事にもあるまじ。言の序に、言語の不調和なる一二を擧れば、

……偖も〳〵事は毀れて候なりあんぢや毀れた何として毀したされば斯ふして毀れました鉄茶碗のつぎのはなげに云々(四十九頁)

……假に詞の調子をはづませ願ふ緣談障なく結ばれ三國一は云ふも愚や日本一の婿取濟しぬ今日はご祝著の日又もあらじ新婿君を壽く爲め例の腕酒一ツまいらせん前野氏の今宵こそは日頃の御技倆をあらはし給へ一升入の盃開きいたさんとて戀婦御寮に酌を取らせソつよりと心深く欵待はり(五十四頁)

……ヤアレ急ぎ給ひそ僞は申さじ其刃拄げて暫く引かせ給へヒヲリするたびヒイヤリヒヤリと肝に答へて五臟の虫が憶ゆるかさん候僞はらぬかハア早言へハア何故言居らぬヒエ只今〳〵暫く〳〵桑原〳〵拙生も早う申たうでならぬが齒と齒とが折合ふ亭主の殿水一つ賜はれ物前には兎角戰慄がとまらぬものよエゝ汝武士に似ぬ甲斐なき生根ソリヤ引いたぞ云々(八十二頁)

此の如く、馬琴京傳の物語樣あり、美妙齋が武藏野調あり、今樣の會話振、能狂言の凝詞、態々種類相雜りて、區別立てすれば限り無き斗りなるを、作者は都合によりても、斷り置き給いたれど、言語の不調和ほど、見にくきは有るまじくと思へは、只管に此の注意をこそ願はし。

總評　以上遠慮會釋もなく、數ひ擧げ申たれど、何を申すも名人の御作、決して〳〵惡からふ筈なし、殊に篇中壓卷とも感じたるは、自序其碩か三馬か、さら〳〵として調子よく、そして何處にか、苦味充分の思入れ見せられし腕前、表紙より挿紙より、是丈の外には何の申分あるふぞ、只此上は强らいと申す斗りぞ。

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

雜錄

○圓朝が落語を聞く

破月子

むかし或る武將は舞姫の舞堪能なるを見て慨泣せしよし破月子が此の感盖し此に類するなり斯くして落語を聞くときは亦益なきにあらず左に掲げて同好に示す(編者、白)

落語家中三遊亭圓朝の名高し、近き寄亭に名を掲げたりと聞き行きて見たり、先づ前座の者には少しも感心せず唯だ放蕩なる書生の歡心を買はん事を務め其言賤劣にして卑猥唯だ下情を寫し徒らに其態度を奇にし顔をしかめ手を振て笑を得るを以て巧なりとするが如く屢々耳を蓋ふの止むを得ざる感あり圓朝の席に登るや其未だ言なきに場中粛然として人なきの心地せり、然して其舌を動かすに至ていよ〳〵靜逸、其佳境に入るや聽者啞せるが如く心魂全く去て我れ在るを知らざるものゝ如し、侠客肌の職人も默せり、亂暴風の書生も言なく、半白の老婆は涙を流し、二八の介孃は眼を赤くせり、これ圓朝が悲哀の境界を寫せるの時なり忽然變じて彼れ奇絶の語を發する兩三語衆悉く抱腹絶倒す、彼れまた怒る聽者悉く腕を扼し齒を噛で怒色面に顯はる、破月子傍らにありてこれを見これを聞て心窃かに歎ず、一國の政治を論議し其可否を決せんとするの壇上に於てよく人心を修收するの人に乏きは如何新富座に愛國の志士は演説せり喧騒亂雜其論旨を知る能はざらしめしは如何、余は實に現今政治家が其技倆いまだ圓朝の巧妙なるに及ばざるを知る而も奇を好で唯だ社會の人心に投ぜんとするの人多きを知る筆を振て世の人情界を跋渉し其筆法新奇にして一時人心を買ふの落語前座的の文學者多きを知る然れども一讀して氣靜かに再讀して心濟み參度繙て身は忽ち現狀にあり羽化登仙するが如き絶妙なる文字のいまだ我が文學界に顯れざるを知る、圓朝は三寸の舌によりて人を氣死せしむ我れ等は何によりて人を動かすぞ舌固より彼れに及ばず筆又彼が如くならず、余は圓朝の落語を聞て余等が社會に對するの務め其働き其行爲の足らざるとかつ最も拙きを思ふなり。

然れども利器は又人を害すること大なりと破月子敢て圓朝子に申す子幸にして義士節婦孝子の逸事を説き間接に人をして其德性を發達せしめば子が功は偉大なり子が舌は風に尊ぶべきの利器なりもし不幸にして不義のために辨じ不德を讃へ醜辭を口にし人心を拙劣の淵に導くが如くんば子が言は社會を亂る可きなり子が舌は尋〔常〕人を害するの器なり、今日子が寄

亭に集るの徒極めて多し子よく反省し先づ辨ぜよよろしく社會の諸君たる勿れ其寄亭に集るの人よ徒らに談を好むの人たる勿れ、其說く所にして德性を害し精神を傷くる如きあらば再び其塲裡に臨む勿れ、奇態珍狀をなし卑陋の語を發するの落語家に近くを止めよ、世に禁酒廢娼の義盛なるに非ずやしかるに彼等は恬然として可厭の言語を公衆に述べり又これを聞てたのしむの人多きは何事ぞ聞人もまた反省して先づ聞けよ一夜寄亭に遊で破月が得たる感は右の如し。

○梅に月茶さへも入らぬ夜なりけり　　標正町　あさ女

家は金殿にあらずとも漏ねばよし、衣服は錦にあらずとも暖かなればよし、食は珍膳にあらずともひもじからねばよし、妻は顏に色なくとも賢なればよし」とは菅家の遺訓で實に尊ぶべき言葉です妾は近頃都鄙共に驕奢に流れてまゐりましたを常に歎じて居りましたが近刊の富國第貳號にも如何にして我國を富すべきかと題して(前略)常に富力不相當の奢侈を為して以て紳士紳商の躰を得たりとなし、徒らに交際社會の勇者となりて以て紳士紳商の躰を得たりとなし、畢生只力む外觀の修飾を、而して堂々たる壯閣は負債の山となり、典物を流れとなし、冷かなる山水を望んで獨り自から苦しむ云々と述べ國民の友記者は其七拾壹號に於て國力の消長に關する一要件と題してスマイルスの節用論等を引いて驕奢の弊害を說き儉約の力むべきを懇々と論じられましたが誠に謝すべき事共です昔しは百姓家などでは一枚の羽織を一ヶ村或は二ヶ村で借り合つたと申しますに今では七子織が佳いの裏は縞甲斐絹に限るの萬古でなければ茶が不味いのと云ふやうになッて來たから困ります。斯く申す妾なども母とは違て自分の髮を人に結て貰ひますが思へば耻かしい次第で御座います。

○ストーブの烟出し　　社の小僧

私は此前ストーブの烟出しの事を一寸と申上ましたがあれではドーモもの足ない心持ちがいたしますから今又心付た事をかきのせます、ストーブ烟出しが長いのはもとより惡いのですがその惡いのは橫に長いのがいけません、直立に長いのはさのみに害はありませんそして縱てに長いのはストブの燃えをようする事があります、空氣の壓力が長ければ長い丈けにストーブに及ぼす力が薄くありますからの事です、製造所や其他の塲所にて烟突を長くするも此理でしよう。煉化石でこしらへた煖爐室の烟出しはいざ知らず普通の家屋に於て用ゆる薄葉鐵にてこしらへた烟出しはそれによりて部屋を煖た

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

ゝめる事に於て余程大なるたすけをいたします、烟出しの曲て居るのは燃るためには悪いのですがしかしまた一利一害で部屋が焼くなるのには曲た方がよいのです、なぜなればその中の熱氣は直進して屈曲したる場所へ當ります事が激しひ故曲角と云へば他の眞直な所よりも手を觸れて見ても熱ふ御ざいます。

○大磯涙の記　霧栄子

廿三日午後三時大磯より電報わり新島先生逝くと云ふ余は直ちに滊車に乗じ大磯に向つて發す早く先生の死顔なりと見たしと思へば滊車もいと遲し、

君を見んといそぐ心にくらぶれば
滊車の運びぬ遲くぞわりける

まち久しきまゝ何處の停車場にて戸を開かんとて呼ぶ人の聲も皆大磯とのみ聞ゆるにぞ兆にわりし人に此處かと問へば否とのみ答ふさて漸く大磯に着き滊車より下れば早や七時にてわたりは眞の闇なり雨もしどろに風さへいとつよくふき淋しくもまた悲し、

雨風のわらきうき世を立去りて
たのしき國に君はいにけん

停車場にて車をよぶ余が乘りし車の車子は燈消えたる提燈持ちたりければ余が乘りたるのちに火をつけぬ其内に共に行きし人々の車は何處ともなく駈け行きて後の下より見れど誰も見えず獨り車の上にて、

まてしばし我も行かなん打つれて
死出の山路に君を訪はまし

先生の宿し玉ひし宿舎につき打つどへる人々にくやみの言葉を述べさて先生の遺骸はと問へば此方なりと導き吳るゝ人わり其人のわとに打連れて奥の間に行けば白き衣かつぎて打ふしたるは是ぞ先生なるべしと側なる人に一目遇はせてよと云ふさらばとて白き被をとればかねて見し御顔のまゝにて打とけて眠り玉ふが如し失せ玉ひしとは見えじと思へば心も坐ろに取亂れて夢の如しいとゞ瀬なす涙を袖にて拂ひつゝ

雨そほつ大磯浦の夕やみに
夢路たどりて君を見し哉

今夜の滊車にて歸らんと思へばやがて其宿舎を立出てゝ亦車にのりて行く程遥に海岸の方に聞ゆる波の音いと凄し、

いくばくの人の袂やぬらすらん
大磯浦によするしら波

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

打詠じつゝゆけば車子が早や停車場なりといふ車を下ればまだ滊車の出るには少しひまありと云ふ待つひまに見るともなく窓より外を打ながむればぬば玉の闇夜にて何も見えざれど沖の方に波の音は高く聞えけり、

　世の中の光も消えてわだ波の
　　よる音すごし大磯の浦

まつま程なく滊車つきければ直に乘らんとす折しも烈しき風につれて雨注ぐが如し餘り恐ろしきまゝ、

　ものすごき大磯浦の夜嵐は
　　死出の山よりふくにやわらん

滊車に打乘りて二人の友と打語り打泣きつゝ東の都に歸る時に夜半の鐘かすかに聞えぬ。

○不淨の人物は遠慮すべし　　あき女

昔しは娼妓藝妓茶屋女などは足袋をはかず（一ツには伊達とか申て）役者は外を歩行に編笠を冠た者だそうです（親孝行を以て有名ある八代目團十郎は贔負厚き新場「魚市場」を通る折は下駄をもぬぎし由）が今では斯る輩が大層な威勢で乘た車夫は良民を叱咤して往來を馳て行ますからつひには不敎育の婦女子をして羨望せしめますのはくれ〳〵も慨わしい事と存じます或人の句に乞食は花へ下りて花見かな。

○愛情論（其四）　しきたへ

靜肅謹嚴ある妻は、磊落疎暴の夫をしてよく其性質を一變せしめ、壯快活潑の女子は其友の温厚篤實なるによりて自ら感化を蒙り、其交りの間に於て知らず〳〵彼此相互に鴻益を受くる決して少々に非ざるなり、世上もし異性者の交りなかりせば人は寒風積雪のうちに洗足徒行するの感あるべく、社會は極端に走せて世事益々無味冷淡なるべし、愛情は性質の相異なるの人に於て深く交情は其地位業務の差あるによりて厚し、これ唯だに靈性の上にのみ云ふに非ず、生理上よりも又同樣の形勢を現せり肥滿せる妻に瘦せたる夫あり、神經質の夫に脂肪質の妻ありこれ等は吾人が屢々目擊する處なり、これによりて人類の健康を維持し社會權衡を保ち得るなり異性者の愛は厚く、深く、堅し、然して又其利多かるべし。

つがい離れし鴛鴦はいかに憐れなるよ、磯の鮑なる思はいかに苦しきよ、然れども世上見る所この類の人多きを如何せん才子佳人相遇ふ事稀なり、反して痴漢駿馬に跨る事多し、凡そ愛情は獨有に得べきものに非ず我れ自らの愛情を我自ら樂む事能はざるなり、これを他に移し又他より移されてこそ始

めて眞の深味を知り得べきなり。

然していまだ移すべき所なきに苦しむの愛をして曲てこれを移さしめんとし既に移し得べき所あるに縱て其方向を他に變ぜんと計り、既に移し得たるに卒然其移す可き所を取り去るゝが如き比々として吾人が見聞する所なり社會には弊害のなき限り自由結婚の制裁あるべからず、然らずんば世に不幸の男子を出し絶望の境界に漂泊するの子女多かるべし慘憺たるホーム、冷淡なる交際、敵視する朋友、悲む可き伴侶、薄命を喞つ寡婦、賴むなきの孤兒、いよ〳〵其數を増さん余は今社會に於けるこれ等の可悲誤謬に付て愛情の苦痛と誤てる戀慕に付て論ずる所あるべし。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰

○新嶋襄先生送葬

(日記抜摘) よしはる

新嶋襄先生永眠し、西京にて送葬の式あるに付、われ百事を擲うち、廿六日未明第一車に乘りて行く、夜半着し父の家に一宿し、翌廿七日早朝新嶋氏の邸に弔ふ。邸は丸太町上る松蔭町にあり、地四五百坪圍ふに土の塀を以てし、門前琵琶の樹葉なく悄然として孤立す、入つて案内すれば既に多くの來り弔ふものあり、中に知れるも少なからねど亦未見の人頗ぶる多かりき、夫人は今ま極めて忙はしと聞き暫らく待ちつら〳〵應接室の躰を見るに、疊十四五を敷くべし、東面して庇き窓あり結構粗末にして天井高からねば甚はだ暗く、左なきだに悲しきを一層に鬱して見えぬ、飾りと稱ふべきものは一ツもなし粗造なるオルガン一几備へたるすら格外と思はれたり、壁には北にワシントンの肖像を掛け、相對してラーフエット、ワシントンの家居を訪ふの圖を掲げ、西に勝伯が襄先生の需に應じて揮毫したる額一面あり、辭に云く、

自處毅然、處人藹然、無事澄然、有事斬然、得意冷然、失意泰然。

此他には刷り物にしたる林子平の碑の文一掛、洋書十數冊、椅子六脚、ソーフハ一個あるのみ、知人に問ふに此室の躰裁先生生前の時の儘なりと云へり。令弟公義君及び新嶋夫人に面し、生が深く痛悼するの意を述べたり、又金森通倫君には同志社大學の事に付友人嶋田君が苦慮傳言せる衷、及び愚考する所を告げたり。出てゝ邸后に至れば、一二の小花壇悉とく荒れ、何物を植えしかは知らず、新作の疎數畝斗り特に草なきを見るのみ、

他は茫々として廢れたり。

午后葬式迄に一時半斗り殘れば、辭して出て祇園女工場、京都私立女學校、高等女學校、尋常師範學校女子部等を一見したり、夫等の事は別に記すべし。

午后一時同志社學校に到る、洋館三四巍然として空に聳え、日本屋の寄宿生を容るゝもの數廊、其他十數の小棟秩然整然として嚴列し、數十の工夫石を打ち今正に理化學教場ハルリス館の新築に着手せり、われ之を前の新島氏の邸に對比し、沈想感慨に堪へず。

講堂は極めて廣けれど尚ほ來會者を容るゝに足らざればなるべし、堂前に天幕を張り假に式場を設く、余れ到るとき一千五百餘名すでに塡充し、而も寂として聲なし。

一點鐘鏘然として鳴れり、主會松山高吉君立つ、時にフユーナラル、ベル(弔送鐘)數十連打し、力らあく雲に響く、其の音心に徹して悲し。

會衆一齊に五十五番「神は愛なり」の歌を唱ふ、次に山中百氏聖經エペソ書第三章を朗讀す、之れ先生永眠の前一日人に乞ふて讀ましめたるの文なるを以て特に之を撰取せりと聞きぬ、次に宮川經輝氏祈禱す、次に某氏賛美歌第二百一番を獨唱す、次に綱島住吉氏先生の略履歴を讀むと左の如し、

君は上野國安中藩新島民治の長男にして天保十四年一月十四日東京神田小川町一つ橋外板倉藩邸に生る、七五三太と稱す、家格士籍常班の下にあり、六才にして習字を始め八才にして畫學を學ぶ此頃より漢籍を修む十四才にして藩の句讀師となる、十六才にして江戸海軍練習所に入り、杉田玄瑞に就て蘭學を始む好んで三角測量術を學び、十八才にして自から一船の長となり江戸灣より遠州洋を航して備中玉島に到る、此時航海術を以て幕府より十五人扶持にて召出さる君辭して受けず、二十一才の時板倉本藩板倉周防守の持船快風丸に乘して沿海測量に從事し函館に到り外人に就て英語を學ぶ。

元治元年六月十四日米國商船に投じて支那沿岸の海港を經て米國に到る、ボストン府の紳商ハーデー氏の知る所となり中學より累遷してアーモスト大學に到り更にアンドーバー神學校に入りて神學を修めB.D.の學位を受く。

明治四年米國在學中岩倉全權大使に隨ひ歐洲諸國を遊歷し各國教育文物制度國風民俗を觀察せり、而して明治七年米國沿山洲に於て日本教育の宿志を演說し米國人士の贊成を得同志社の基本此に於て成りたるは載て同志社設立始末に詳なり。

明治七年十二月廿六日歸朝す、八年十一月山本覺馬と結社し地を西京にトし學舍を創立す是實に同志社の濫觴なり、九年一月三日山本八重子と結婚す。

爾來同志社の事業着々擴張し同志社教育の名聲漸くにして世間に顯はれ遂に進んで同志社大學設立の計畫に着手するに至れり而して其旨意書を頒布す時に明治十六年其詳なるは大學旨趣書に就て見るべし。

明治十年始めて日本基督傳道會社の創立に關し委員となり盡す所ろあり、明治十七年四月六日再び歐米漫遊の途に就く、十八年十二月十七日歸朝す、君漫遊中始めて心臟病の大患に罹り此よりして君の身体漸く衰弱の価を作れり。明治廿二年八月アーモスト大學より「エル、エル、デー」の學位を附與せらる。

凡そ君が明治七年歸朝前は直に苦學研精を事とし歸朝后は民間に在りて專ら教育と傳道とに全力を擧げ特に十九年以來は同志社大學設立の爲に其病軀を抛ち以て相州大磯の客地に於て明治二十三年一月廿三日午后二時二十分永眠せり享年四十七。

次に小崎弘道氏ヨハチ傳第十二章第廿四節を題とし、麥にても米にても先づ腐れ而して后ち饒々の實を結ぶと論じて、ハッス、ウイックリッフの例證を擧げ、殉教者の血は教會の光にして、先生は即はち平和時代の殉教者なりとし、先生死すと云へども其志望決して廢る可らず、弟子等クリストを失つて后ち聖靈降り、ペンテコステの日大ひに力らを得たる如く、茲に一の先生を失ふを以て后來十百の小新島を出さん、吾等は先生が道を信じたる如くに信じ勉めて其遺業を爲すべしと云ふ、誠實熱心にして語々肺肝より出づ、語滯らかならず辭は且つ短かゝりしと云へども能く聽衆を動しぬ、次にデビス氏祈禱し、次に會衆總立二百十三番の歌を歌ひ、杉田潮氏祝禱を以て終る。

墓地は若王寺なり、われ固とより行きて送りたけれど歸京の時刻迫るを以て敢て隨ふとを得ず、只だ尾して半途に至り目送し了りぬ、列は數丁に渡りしが人多くは徒歩せり、特に花を捧もの、旗を持つもの、棺を擔ふもの、一切同志社學院の書生なり、寄花は元と謝絶したる由なれども續々來捧するものあるにより止を得ず受取りたるものゝ由、旗は聖經の語、若くは先生を弔するの句を認む、特に目立たるは、東京民友社より寄せたるものにて自由教育の泰斗云々新島先生万才と記したり、書生は皆な屈強の壯士なり、弊衣破袴、足鞋を穿ちケットをまとひ、雨中頭髮蓬々として亂れ、すさまじくも倚雄々しく、悲みを帶びつゝ粛々として列歩するの狀大ひに見るものを感動せしめぬ、教師、役員、牧師、傳道師、等皆な歩し、商業學校生徒若干同じく會葬し、亦た大坂佛徒有志者と記せる大旗一流を立て、八田某發起とし老壯數十名伴ひ隨へり、最后に知事議長其他一般の會葬者、馬車人力車二百輛に乘じて徐ろに行く。

余れ目送して凋焉たり、遂に雨中に立つを自覺して家に歸り父母及び來訪者數名に談じ、匆々旅衣を復裝して別れ、終一列車に乘じて東京に歸る。

嗚呼新島先生は逝けり、吾等亦既に之を葬りたり、先生の一生を追想すれば、先生は實にクリストの真僕なりき、此の一語蓋し万評に優る先生亦喜んで受納せらるゝことと信ず、嘗て先生の談ぜらるゝを聞けり、云く箱館より脫逸して洋人の艦に乘じ、其火夫となりて航するとき、武魂熾烈にして洋奴の無禮を憤ほり、特に艦長の妾婦が禮なきを見て鬱怒禁ぜず、或る時は將に自刄せんとしたり、最后に艦長が其足を洗へと命

ぜし時は、慷慨遂に堪へず、悄絶水に投ぜんと迄に痛みたり、常時たゞ國事を思て恨を飲み生存したるが、后ち米國に於て聖書を讀みクリスト其弟子の足を洗ふの句を讀に至りて釋然改悔し、人の誇の極めて卑しく、神の愛の至て大なるに感泣したりと、蓋し先生の一生は人の足を洗ふの覺悟より成る也。先生慷慨にして大志あり、一朝道を信じ、國家の基礎教育に在ることを確認してより、遂に私立大學を成立せんことに盡力し、熱意猛進して他の百事を棄てたり、然れども傳道の事に至ては一日も忘れず、其の死するに臨み、日本地圖を開きて未だ教の入らざる各地方に傳道するの方案を遺言せり。

先生の愛は博くして切なりき、嘗て同志社生徒が洋教師及幹事の行爲に付きて平ならず俄に退校せんとしたるとき、先生之を留めて説述すること數時に渉り、其間木片を取り語り且つ自ら鞭うつ、連鞭連下、中ごろ木片兩つに折れ、折尖掌を破り流血淋漓たり、書生大に驚き且つ太たく悔ひ遂に退出するを止め、彼の兩木片を組みて十字架形を造り額と爲すもの尚ほ現に存すると云ふ。又た同志社學院の規模擴張し大に祝會を催うしたることあり、それがし連りに慨論し大いに前途の望みあることを陳じ衆心大得意の時、先生泫然として泣き、數年前不品行の廉によりて退校を命ぜられたる二三の書生を懷ふて痛歎したり。

先生は學識深長なるにあらず、才氣非凡なるにあらず、腕力剛猛なるにあらず、たゞ一片誠忠博愛の念滿腔に溢れ、日本人改造せずんば國礎の決して安泰ならざることを斷信し、身命精力を盡して基督教育の擴張に從事したり、其の眞摯にして熱心ある所ろ蓋し万人に卓越する所たり、特に其の道德上の感化力優渥にして一と度び之に接したるものをして永遠忘るゝこと能わざらしむ、先生西國より歸朝するの數日、余れ之を旅館に訪ふ、先生談半ばにして肅然容を改め殆んど泣かんとして曰く、嗚呼西國の形勢如此し、僕今日もし眞正の青年を養成すること能わずば世に存するの甲斐なしと、當日の語尚ほ耳にあり、先生の風采長なへに忘れがたし。

ミ、・チ、

○早起の必要

朝早く起る事は一家の爲めにも亦一國の爲めにも必要であります然に英國杯には恐るい風俗があつて朝早く起て働くものは職人の樣な下等社會のする事と思つて居ります夫れ故貴族

れ大抵夜になると夜會だとか宴會だとか或は舞踏會だとかいふ樣なものを開ひて終夜寐ませんそして朝日の出る時分に床に就て晝の間眠つて居りますロンドンの街に居る貴族は晝の十二時頃朝飯を食し日の暮れて後晝飯を食し朝になつて床に就くと云ひます是が果してイー風俗でしようか近頃日本でも追々此風が行はれる樣ですが斯樣の風俗早く捨てなければいけません其理の一を擧げれば日光を要する事です凡そ生活して居るものは必らす日光を受けなければありません床の下に生へる草や木は靑白くなつて生育ません亦洞穴の中で育つた人は大抵色が靑ざめて身體は薄弱です或時露西亞國で兵隊の病氣に罹つたものを調査べて見たに日のさゝない方の室に住で居た兵士の內で病んだものは日光のよくわたる方に居た者の三倍あつたといひます亦名高ひ看病婦ナイチンゲールといふ人が云つた事に病氣を治すに新鮮の空氣に次で必要のものは日光だと申します殊に婦人の產後には日光を受けると早く快復そうです斯樣にして生て居るものは日光がなくてならぬものですさすれば晝寐て夜の間に勉强したり遊樂に耽つたりするのは天然の法則を破るのですから決つしていゝ事ではありません故に英國の樣な恐るい風俗は日本に行はれない樣にしたいものです此外早く起る必要は多くありますが長くなるから次回に申ましよふ。

○きよめぬ庭

酒落齋八田編

地謡 あか〱に淸めぬ庭はちりもなし〱、風に任する我身かな

酒 此はこの邊に住居する—噯智識に酒落齋八田と申者にて候、今日ッは愛姫君の御館より御召に預り候ほどに、只今より御館へ參らんと存ずる

謡 余りに路を遠く來て、馬車人力にへだてられ、入つる方も霞、瀑布の音をも雨とのみ、聞えて松の風もなし

酒 急ぎ候ほどに、早御館近く參りて候、姫君の俟ち給はんに、イザ急いで伺候致さんと存ずる

使 其所に見えさせ給ふは、酒落齋先生には無之や

酒 いかにも仰の如くに候

使 姫君の俟わび給ふにより、再度御迎に參りて候、イザ〱書院へ通らせ候へ

謡 玲瓏たる玻璃の障子を覆ふは里昂の文織の、廣き一間は一面に、瞳をかくす斗りなる、絨緞を引詰たり、上位には桑の椅子に、姫君倚り給へ、尙ほ側には數多の姫君、居列び給ゐ、各々春の粧を凝らし、蟬雲爲レ誰梳、紅顔爲レ誰粧、霞の鬟、月の眉、實に窈窕にぞ見へさせ給ふ

姫 いかに酒落齋、わがみ長らく女學雜誌を讀み候とて

ろ、近頃は餘りに堅くろしくのみなりもて行き、わがみのでとく家に在つては父母に事まつり、學校に出でゝは師の教をうく暇あるときは女學雜誌に氣を慰めんとするところ、常もかく堅くろしき事のみにては、慰みにはあらずして反りて小言のみ云はるゝこゝちぞする、あにとか編輯の人に告げて面白き事を書せんと思ふは如何に

酒　仰御尤に候、澁柿のみさし上候ては、此後は甘柿も御嫌ひにあるの恐れ此あり然は酒落齋一切御引受け申て、時々姫君達の御腕の下を抓擽ふずるにて候イ、ヤー。

小說

○イナツク、アーデンものがたり

テニソン著
米女譯

ある夕ぐれのことにエニイの子供が人とつれ立て、林へ榛拾ひに行たがり升て、折ふしエニイも一處に行ことにし升た、それから粉屋のおとつさんにも行て貰ひ度とて、機械場へ立よつて見升たら、フィリップは花粉にまみれた蜂の樣に粉だらけになつてゐる處でした、「サア一處に入つしやいと云れて、始めは斷り升たが、餘り子供がひつぱる、見ればエニイも一處でしたから、笑ながら其意に任せて、とう／＼みんなと行升た。

やがて半分道も來た頃、林がなだらに下る處で、エニイは疲れに堪ず「鳥渡こゝで休ませて下さい」と幽かに云升た、そこでフィリップも他事なく一處に休んでゐる間、子供等はおとなを跡にして嬉敷そうに大聲あげて、霜枯始めてる榛の木の中へ割て飛込み、下へ廻つて散／＼になり、ピツシリ實の着た細枝の物惜みぶりなのを屈たり、折たり、呼介聲を林中に鳴渡らして面白そうに騒立升た。

フィリップは此時エニイの側に坐つてゐて、エニイと一處にゐることさへ忘れて、考へてゐたとは、いつぞや丁度此處で、手もなく、自分の生涯に創つけられた思で、人知れず、木影へ逃込んだ心細い時のことでした、それでもしまいに實直な質の現れてる顏をあげて、「エニイさんあれをお聞なさい、子供たちの嬉敷そうに騒でゐる音を」と云升たが、一言の返事もしませんかつたから、又、エニイさん、どふだへ、くたびれてるかへ」と尋ねて見升たが、エニイは此時また兩方の手を顏へ推當てゐ升た、フィリップはこれを見て少いらだつ氣味で唐突に「モウおまへさん辦舩したんでせう、イヤそれにきまつてゐ升は、おまへさんもいつまでかそうくよ／＼してゐなさら

ぬが好ではないか、あげくの果はおまへさんまでがない人になつて、子供たちをほんとうの親なし子にしなすつたらどうしなさる」と云れてヱニイは「わたしはほんにそれまで考がおよびませんかつた、がどふいふものか、子供たちの聲を聞てムヤミに淋しくなりましたと云升た。

フイリツプは此時少し近く寄添つて、こふ云升た「ヱニイさんわしの心に久敷前から考へてることが有り升がいつ頃から其ことがこゝろに起つたか自分でも分らない位です、併しこふいふことはキツトいつか知れるものです、先、ヱニイさんおまへさんが十年まへに別れなすつた人はまさか今まで、生てゐなさりそうな道理はあり升まい、サアそこでわしがおまへさんに話があるのだ、わしはおまへさんが貧乏しなすつて、助ける人のないのを見て眞實氣の毒です、たが今の分では思ふ様にしてあげることができない……女といふものは兎角察しの好いものだといふこと、おまへさんも多分モウ分り升たろう、わしがおまへさんを女房に欲敷といふとが、わしはおまへさんの子供におやぢになつて上たい、子供たちはわしをモウおやぢの様に思つて呉る様に考る、そうしてわしも自分の子同然可愛くおもふ、それにおまへさんがわしの女房としつかりきまれば、お互に今まで幾年も心細い、覺束ない年月を送つたけれどまだ〱神のお惠みでこれから幸福も人並には來るだろうと思ふのだ、マアひとつ考へて御覽なさい、わしは金はあり、親類厄介は一切ないといふので、これからはおまへさんたちの世話に力を入る計りです、増しておまへさんとわしとは子供のうちからの友だちで、それにわしがおまへさんを思つてることは久敷ことで、おまへさんが知らないまへからのとです。

聞てヱニイはやさ敷こふ答へ升た「あなたはわたし供の家にとつては一方ならぬ恩人です、わたしは神さまも何卒御照覽あつてあなたにお惠のある様に祈つてゐ升、併しあなたへの御褒美はわたしの様なきぶつせなものではいけません、そして一度人を深く慕ふたものが又外の人に情を移すことが出來ませうか、イナツクを愛した通りにどふしてあなたをお愛し申れませう、あなたはマアわたしにどふしろとおつしやるのです」、「わしはイナツクさんの次に愛して貰へばそれで澤山です」とフイリツプがいふのを推とゞめ、何か急に恐敷いとを思出した様に「フイリツプさんマア〱少しの間待つて下さい、萬一イナツクが歸て來升たら……それは歸りもし升まいが

…兎も角モウ一年待つて下さい、一年と申ても大して長いことは有ません、そして一年の中にはわたしも物どとが分つて來ませうから、お賴ですよ、フィリップさんモウ少しまつて下さい」、フィリップは悲しそうに「エニイさん、わしはおまいさんのおかげで一生まつてた樣なものですから、モウ少し待のは何でも有ません」、「イヽへいつまでもとは決して申ません、慥に一年丈とお約束をし升た、キットです一年まつのはあなた斗りじやないわたしも同じとじやありませんか、フィリップが「いかにも一年待とうと」返事をし升た玆で兩人ともだまつてしまい升たがフィリップがフト見上て夕日の殘が高臺の上の彼の砦にかゝつてゐるのに氣が着き、夜に入て冷てはエニイの爲にわるいと心配して、呼聲を高く林の中へ送り升た、子供たちは手ん手に拾つた實を重そうに持て急で上つて來升た、そこで一同に連立つて山を下り、港へ來升たが、フィリップはエニイの家の戸口へ止まつて、挨拶する時、靜かに、「エニイさんわしがおまへさんに話をした時はお前さんが心細がつてゐた時でわしがわるかつたのだ、わしはいつもおまへさんに約束がしてある心もちだが、おまへさんの方は決して無理にとは云ないから自由におしなさい」とこふ云升たが、エニイは泣ながら「イヽへわたしもあなたにお約束が申てあり升」と云升た。

エニイは自分のこふ答へてからいくらもたゝぬ中まだ家の内の用事をしながら、フィリップが自分の知らぬズット前から思つてゐたと云つた言葉などを兎やかく心に考てゐる中に、ハヤ秋が秋へと瞬の間に移てしまい升た。そうしてフィリップは約束の事を催促に來升た「モウ一年になり升たか」とエニイが云升た、「サヤウさ榛が熟してゐればそうです、外へ出て來て御覽なさい」と云升た、併エニイは又延ました、色々また取片着る事もあり、それに引移といへば容易ならぬ事でもある、彼是、モウ一月の猶豫を……約束は動かれぬもの、それより長とは申ませぬ、一月丈とたつて賴み升た、其時フィリップは久敷忍で、待てゐたもどかしさが心に一杯になつて、聲を酒呑の手の樣にブル〳〵震はせながら「エニイさんそんならいつでもおまへさんの都合の好時になさいと云升た。エニイはフィリップが氣の毒で涙がこぼれるほどでしたが、まだこれから色々信じられそうもない口實をまふけて、のび〳〵にして置升た、そうしてフィリップの實のある事と堪忍深いとを試してゐた間に又半年いつの間にか立て仕舞ました。

寄書

○新島襄先生の遺訓

佐々城豊壽

我國宗教家の泰斗又修身科私立大學の卒先者なる新島襄先生は明治廿三年一月廿三日享年四十七歳を一期として溘焉永眠せられたり是深く永別を惜むのみならず同胞子弟教育の爲め大に前途に要なき能はず先生は愛に溢れ錬に満ち献身の決心を以て盡され事業頗る大なり未だ其全き功を見ざるに遠逝せられたるは實に痛歎に堪ざる所なり然して先生の履歴江湖世人の普く知る所なれば不肖なる余が不文を以て先生の履歴を述べんとするは完全無缺の玉に傷つけんの恐れあれば玆に書き唯余が先生の口よりして直接に給ふ所の訓戒を記して以て紀念となす又自ら警め自ら勵まんと欲す曩に先生が十八九年前米國より歸朝せられし際横濱東京に於て説教或は演説成されし時聽者をして皆其德を慕ひ日本國民の父母たるの感を興へしに余も亦其一人にして欽慕の情止むなき先生を見んと欲するも先生は居を京都に卜したれば失望限りなかりし然れども先生の芳名は益々溢れて全國に及びたり遂に近年に至り大學設立の盛運に及びたり余は此教育の我日本に發達せるを悦び此事の万分の一を盡さんとて同志の姉妹と共に併樂會を開き僅レプタ二ツを投じたりしに先生の謝書を賜ふし却て恐縮に思ひたり先生は昨冬上京せられたれば昨十二月廿三日鍛冶町の茂林館に於て初て面話の榮を得たり先生の容貌風采余が想像に違はず温順にして威あり言語極めて鮮なきも一言一語と雖も價値あらざるは莫し　先生の余を見る慈父の愛兒に接する如く嚴肅の間に言ふ可らざる恩愛を含みて言はるゝに、今日玆に面會したるを幸ひに貴姉(余に向て)に頼みたき事業あり、そは外の事ならず女權を擴張する事にもふ一層の力を盡されたし今日の形勢に於て實に大切なる事なり何せなれば近來人物少なく道德廢れたるは源因種々なれども道に離れたると社界進歩するに隨て男女の權平均をいざるとに由る所以なり故に先づ女學校生徒に人權を重んずべき事と慷慨心を起さしむるの一事也なり從來の女學校生徒の卒業生を見るに大躰長年の間父母に苦勞をかけ大金を費やさしめ苦勞を積み漸々卒業し終るや否や一旦他家へ嫁したる後は殆んど學ばざる**女に少しも違はず社會の爲に働かざるは勿論の事にして學ばざる女同様に男子即**ち夫の壓制を受け何一つ意の如くならず折角學びたるの技藝を顯はすの道なく却て學ばざる炊事或は子を養育する事等に朽果るは如何にも殘念なり又夫たるも僅かの情に制せられ此不利益なる事に心付かざるは如何に長き習慣とは言へ氣の毒千万なり啻に氣の毒のみならず文明の妨けなるものなり一躰婦人は社界改良や社交の事には男子よりも勢力あるものなり近來米國ボストンに於て宗教の宣教師及は信徒等が教育に關はる我儘なる所行を爲したるを彼の地の婦人等憤はり忽ち衆くの婦人と申合せ其不正を破るに至れり婦人の力は實に廣大なり然れども我國にては男子ですら未だ國粹家あり保守即ち頑固家あり我が今日までの行跡を考へ見れば實に艱難中穢もなく此人こそと思ひ見拔て心中を打ち明かせば計らざるも我の攻撃者となり又義行と思ひ決行したる事に謗られ嫉まれ恨まれ千辛万苦言ひ盡し難し況んや今日の婦人に於てに其艱難實に察せられたり今貴姉(とよ嬢)に如斯事業を托するは愛姉の生命を縮むる樣のものにて私情に於ては忍びざる事ながら御互に私の爲めにあらず皆神の下僕たるの義務を遂るに過ぎざれば決して人の妨りにより挽むとなく堅するとなき様にせられよ多く艱難を經る者は天に於ても多く恩賞を得る事を忘るべからず又我が言ふ所は世の多數說を以て馬鹿說と言はざるを得ず何せなれば全世界古今有名の豪傑即ち卒先者たる人々は悉く攻撃を受け艱苦を嘗めざるはなく啻に艱苦のみならず爲めに生命を犧牲にするに至れりさればキリストの十字架の如きは世に似たるためし一人も無き所なり故に卒先者たる者は獻身の覺悟なかるべからず事にもふ一ツ一言申したきは現今の信者のこと是なり。

彼の人等は活たる神の御言葉に養はれながら殆んど死物同樣なり是神の御言葉を理解する能はざる爲めなり此故は歎息中の尤も歎息すべき事なり如此有樣にては假令三千九百万人が皆信者なるも以て社界を清潔にならしむるに足らず決して此事は忽がせに思ふ可らずと余は此時胸中を貫ぬくが如く感じたり時已に移りたれば殘り惜きも後日潮田姉を同伴して更に拜聽せんとて暇を告く歸るに臨んで先生寫真を出して余に與へて曰く是は今願ふたる事共を忘れざる爲め呈し置くべしと其后二日を經て潮田姉同伴にて拜顏せしに繁忙を顧みず實に喜んで再會に逢はれたり訓戒淳々と説き示さるゝと大凡一時間餘なり今玆に言ふに忍びず又悲歎心に溢れ僅かに思ひ出し難き事共も多し此日種々訓戒中一言にして生涯忘るゝ能はざる一事ありそは　御身遂決して失望するとなく倦むとなく憚るとなく斷然世の革命者と成られよ　否世の改良者と成りて働かれたしと言はれたり其時先生は慷慨涌に溢れ實に恐はず涙に袖を濡して暇を乞ひしに　先生言ふ此後逢はれざるやも知れざれば又我が爲め同志社の爲めに祈り被下べしと其時余と潮田姉とは思はずも互に顏見合せて暇を告けて戸外に出たるも何となく歎息しつゝ歸宅しぬ其後一日も怠りなく先生の平癒と大學の爲め祈り居りしに不計も過る廿三日先生の訃音**に逢ひ落膽失望限りなし　夫れ言々先生の訓戒を拝受したるは十二月廿三日にして此**訃音に接するは一月廿三日なり僅か卅日前に受けたる訓戒は早くも今は先生の遺訓と成りぬ今より之を遡り考へ出たせば滿面浮腫を帶びて居られたれば或は病中の苦腦もありしならん然れども先生神色整然として毫も餘念なく充分に心中を説き出されたるは淳々として今尚ほ耳にあり今尚眼を閉つれば先生の容貌現然として顯出するを見る　今悲みに耐ず先生訓戒十中の一二を記す。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

開書

○願ふ事四條　井上よし

新島先生の靈を追ひ弔らひ奉まつり、遺る御家族の方々を慰さめ參らせ、同志社諸教授の御骨折一きわならんとを祈り、天が下の義人の之に同情を切に呈さるゝやうにと只管ら望み願ひ侍る。

○全國各婦人會に告げ參らす　西京の一女生

全國には何程の婦人會か候はん、過る年女學雜誌社にて御調べありし丈にても大層の事なりしゆへ、今頃は一層の夥さなりと存じ候、來る四月よりは花の上野に於て大博覧會も候ふとゆへ此際全國の各婦人會の有志の方々相集ひて懇親會を開き、一には日本女魄しひの程を公けに表章さんか云ふとを致し、二には吾女性同志の親しみを結びたくと存じ侍る、東京にある婦人矯風會、婦人教育會、婦人衞生會、婦人白標俱樂部の姉方たち率先力を盡し玉はんとを。

○古著百種休刊につきまして　濱荻英子

文學のある先生一たび古代小說を世上へ示されました、で目の早ひ文學通！古木へ餂かけます、古本の價は俄かに騰貴して假令志があつても指をくわへて後ピシリ。を流石は商賈に拔目のない大坂の書林——東京の「新著百種」にならひ「古著百種」（每月二回）と先頃は發刊しました。が二號限りで休刊した始末！ハテーと云ふ譯かと或る書林で問合せると返辭はこうぢや（あの雜誌中往々風俗を亂すものがあつて發刊すると「發賣禁止」の嚴命が下るテ見合せて居ります）成程！當局者の所爲は公平です。そればかりでなく目下廢娼論の盛んな時節に假令古人の有名な著作でも「古著百種」中「傾城禁短氣」（八文字屋自笑）「風流西海硯」（自笑其磧合著）「傾城色三味線」（八文字屋自笑）「北里十二時」（石川雅望）等は讀むにも耳心に……恥入ります、で雜誌全躰を「休刊」するのは文學上又讀者の遺感です、以上四章のみを除て外に何かを撰みそして續刊を書林主人へ望みます。

●神戸KH、　枕草子にカユの木、狭衣にカユツエと云ふとあり是にて人の尻を叩き戯るゝ風は何れの世より何如なる譯にて起りしものかとの問　粥杖粥の木同物なり又卯杖とも祝杖ともいふ典に見えたるハ文德實錄に仁壽元年正月癸卯諸衞府獻祝杖云云とあれど持統天皇の三年正月卯日大學寮より是を奉りしを以て嚆矢の如く年中行事などにあり杖の長五尺三寸也木は種々あり木瓜柊桃梅椿其外にもあり中昔の頃枕草子狭衣などにあるは梅の楉（俗云ズイ）なるべしさて此の打合ふ事も諸書に見えたれど打合ハ中昔（即ち清少納言）の頃切りに流行したり辨内侍日記建武年中行事などにも此事あり當時の風俗に此杖を以て腰を打てば子を產むマジナヒ也といへり是ハ卯杖といふを産杖といふ意に取りなしたるにや又カユツエとは此の日ハ七種粥とて米粟黍稗胡麻小豆糝を一ツに粥に煮て奉る日なれバ粥杖ともいひ來れる也現今も正月十五日にハアツキ粥を煮る也然して今ハ小豆と米塩のみなれども此れ昔の遺風なるべし後世の風俗中には故事の傳訛して遺れることさまぐ〵あり。

●北越贋說女史　裁縫科を教へる學校は所々に在り升が專門にするのは女子職業學校で一つ橋にあり升、三年で卒業し月謝一圓です、寄宿は無いですか、幹事に賴みましたら何處か確かな所をお世話なさるでしやう、卒業后の事は銘々次第ですが隨分裁縫科の教師ともなれましやう。

●本郷一讀生　お尋ねの如きは開明國には少ないです、夫婦は一躰とも申します故、其披露を是迄の友人にするは尤もの事で亦爲すべきとです、其式は色々ありますが、先づ婚姻の日限等は總べての友人に知らせてやるので婚姻しましたヨと云ふとをわざ〱一々に報するは手後れの樣です、寫眞を一々送るとは出來ぬとで且つ失敬の意味もあり升。

●丹波舟原清水貞次氏　……——の符號は洋名はあり升が日本の名は未だ定りません、色々用ゆる印しで是と云ふ定めがありません？は問の印しです。●

●田舍の乙女　歟のよみ方は通信女學にて鈴木弘恭大人が月々講述されます。

●田舍娘　產婆は一の慈善職で中々いやしひ所ではありません、又東京などでは良人のある人も無い人もあり升が、一の奇なるとは十六七の娘子で立派に產婆になつて居られますが此丈けは婆の字が除きたい程です、兎に角自ら御修業なされて宜しひものでしやう。

通信問答

英語は年に百頁位ひで無効なるまじきやの御掛念を申越さるゝ方あれど決して左様では無い積りで更に高等科に入り自修さるゝ下ごしらへを十分に爲す心得です。

生理學其他地理等には追々圖を入れる覺悟です。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

時事

○女子參政權

女子に撰擧權を與ふるの可否を論ずるとウーメーンス、サッフレーヂの問題と云ふ、西國に於ては現に喋々として論ありゝ、我國に於ては從來之に吻を容るゝもの殆んど稀なりしが、吾人は目下に未だ切要あらずとして暫らく默し居れり、然るに讀賣新聞は其衆議員議院撰擧法の講義に於て端なく此の問題に論じ掛り、ミル、ブルンチユリー兩大家の說を比較して此論の是否を示せり、吾人先づ其好意を謝せざる可らず。

抑も代議政治の下に於ては、何人にも撰擧權を與ふるを以て終極圓滿の理想とす、彼の男子の中に於て此の撰擧權を限るとの不可なるのみならず、之を女子なりとして制限するの不可なるは、論理上道義上に於て極明の事とす、只だ之を許し擴張するの度合は悉とく當時の民度何如に關し全く政略上の問題なりとす、故に之を許の是非を論ずるは抑も不用なり當に其の政治上に於ける適否を論ずべきの著なりとす、之を以て女子撰擧權の論は民度の進歩と共に随つて勃興し、之を許すとの度合も文明と共に随つて進歩すべし、彼英米に於て近年に至り學務委員衛生委員市長知事等の撰擧もしくは被撰擧權を與ふるに至れるは異日遂に國會議員の撰擧權をも之に與ふるに至るの運あるとを預告するものにして、而して英米に於ける如此き段々の進歩あるとは我國に於て亦今后層々として此如き進歩の行わるべきとを證するもの也。目下議員撰擧權を與ふるの可否に係はる通論には、讀賣記者が擧示したるもの丶外に倘ほ有力なる論理ある少なしとせず、吾人時あらば亦た論者に告述するとあらんと欲す。

○月次御兼題

宮中の月々御兼題左の如しと承る、

一月 月前雪	二月 夜外鶯 紀元節	三月 春色浮水 北條時宗	
四月 雨中花	五月 加茂祭	六月 里早苗	七月 紫式部
八月 萩野花	九月 月前風	十月 秋山家	天長節 嶺松
十一月 幼稚園	十二月 霜夜鶏		

我宮中に於ても亦歌題のいよいよ變遷化新して、而も歌躰の獨り三十一と文字にのみ限らぬ様成らまほしき御事也。

○太平閑人

佐久間象山何ほ若き時、星巖の居に於て谷鐵臣を見、其の志を聞きて諫止して曰く、方今の時勢决して詩歌に耽りて優遊すべき時に非ず年少の士は史に有用の學を爲さゝる可らずと、谷君歸居してつらつら考ふるに天下至て太平なり、歸國してつらつら考ふるに天下實に太平なり、象山何を以て斯の如

き杞憂を懷くやと不審したりけるが、后幾千もなくして天下果して紛々雜亂したり。吾人は詩歌を以て優遊の具にあらずと信じ、天下もし亂るればいよ〳〵詩歌を要し、天下沈眠すれば更にいよ〳〵詩歌を要すと信ず、然れども如此き詩歌は世人が云ふ所ろの詩歌にあらざる也。目下小詩人細歌人少しとせず、戯作小說家に至つては頗ぶる多し、嗚呼有爲の少年何を苦んで如此き閑々無用の末技を爲すや、目を擧て見よ天下に洪水あらんとす、日本國家は太平海裏に將に一大狂濤を涌起し來らんとはする也。

○今后の同志社大學

同志社大學の事今后如何成り行くべき、新島氏逝くと云へども英才雲の如く存す博學なるもの、俊利なるもの、達識あるもの、雄辨なるもの、政治家たらんもの極めて多し、要するに英才に於ては欠くる所ろなし、只だ若し惜しむ所ろありとせば、即はち新島氏の如く宏潤博愛なるもの或は欠くるとある即ち是れ也。然れども吾人は同志社大學の事の之より彌よ進歩せんとを確信す、諸英才の之より彌よ熱心ならんとを確信す、但若し同志社をして總べて精神的教育家の全然懸望する所ろ特に切ては宗教界各宗派の有志者の共に掛念盡力する所ろたらしめば、其事業の進歩は更に一層に迅速ならんとを信ずる也。新島氏已でに無し、同志社にして若し一宗派もしくは一門宗にのみ同志の人を要むるに止まらば、其弊や從來に於て皆て在らざりしものも今后に於て發伸し、其の正大公明と稱する所の事業も或は中途に止息し了せんとを恐る。救策他なし、須らく同校の委員を廣く全國各宗派内の有志者に求むべし。

○貧民及安息日

日曜日を安息日とすべしとの事は、吾人必らずしも宗教家として論ずるものにあらず、實に社會上衛生上道德上の大問題として切論するものなり、エヂソン曰く村農夫の仲間に若し安息日なかりせば、彼等が心靈開發の途は殆んど全滅すべしと、安息日休業の事は啻に心靈にのみ關せず、亦た肉体上に關し、特に社會上に關す、かの憫れむべき貧民に若し安息日の制限存するなくんば、暴りなる競爭はいよ〳〵彼等を驅つて彼等をして遂に重苦なる勞働の下に倒死せしむるに至らん、我國從來の勞働は一日間に多くの安息時を置き、職人皆なブラ〳〵として働らきたり、如此き時に於ては日曜日休業なきも左程の害あるを見ずと云へども、規律的營業の漸やく盛んならんとするに際しては今后安息日の制度の亦隨つて嚴肅とならんとを要す、而して之が嚴例を示し且つ論唱するは、

○新聞紙なり

新聞紙にして若し、年中無休刊を誇るに至るときは、安息日嚴守の新習慣を造るに於て誰か俑を爲さん、特に如此き社會改良の事に尤も卒先すべき我黨の新聞紙に至る迄で、尙ほ之に傚ふに於ては夫れ將た他を何如んせんや、去年佛國大博覽會に於ては、諸國の出品委員往々安息日を閑却にするとき、英國獨り之を嚴行して華麗燦々の大會堂日曜日に於ては一大部面の國閉暗黑なるを示す、天下の一大快事なりき、我國目下の社會改良者に亦た此の美風の行れんとを熱望す。

○名醫十八

「眞理」發行所世光社は、東京府下に在る最上國手各一名と看病の最も信切に行屆きたる病院一ヶ所の指名を請ひしに左の結果を得たる由

内科　神田小川町樫村清德●外科　本鄕湯島佐藤進●產科　日本橋區矢ノ倉楠井郁二郎●小兒科　麴町區飯田町弘田長●齒科　芝區伊皿子町高山紀齋●眼科　小石川區春日町須田哲造●精神病　本鄕區西片町榊俶●皮膚病　淺草森下町小田耕作●衛生　本鄕區東片町緒方正規●漢法　牛込區横寺町淺田宗伯●病院　芝區愛宕下町東京慈惠病院

又右の中にて佐藤進、榊俶、淺田宗伯の三氏には競爭者なく須田氏と井上達也氏の競爭は一點の差にて須田氏に歸し、候補者の最も多かりしは皮膚病醫と衛生醫にして甲には小田耕作、スクリバー加藤時二郎伊勢錠五郎江口襄後藤昌文佐藤三吉高木兼寛片桐重明荒井作の諸氏、乙には緒方正規坪井次郎長谷川泰長與專齋大澤謙二中濱東一郎古川榮後藤新平森林太郎の諸氏指名せらる、病院にては慈惠病院に讓て赤十字社病院が多數を得たり。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○廢娼記事

日本廢娼同盟會　過る土曜日發起人の會議あり左の如く議定したり、

定款

一　本會は日本廢娼同盟會と稱す
二　本會は廢娼主義の團体及一個人より組織す
　但し團体に屬せざる一個人は投票の權利及會費收納の義務を有せず
三　本會は毎年四月年會を開く
　但し臨時必要の時は臨時總會を開くとあるべし
四　本會の本部は各團体へ向け毎月一回報告を發し各團体及各人は之に通信を爲すべし
五　本會の事務は各團体の委員會議の上施行するものとす
　但し委員は更に他の委員に委托するとを得
六　本會の出費は各會に於て分擔するものとす
　但し當分毎月金二十錢と定む

右の如く議定し假に女學雜誌社に於て其事務を取扱ふべし各地方の團体は可成く之に加盟せられて全國共動通信交詢便利を得る樣に致したしと思はる。

下谷靑年會婦人會　は前號にも記したる廢娼論の印刷物を内務省初め諸省の官員上野新橋兩停車場乘客、各教會の靑年婦人會、府下各貴顯、各府縣會議員及貴顯等に汎く配布し、又同婦人會惣代として外山えい、靑年會惣代として江口次郎人堀卯三郎の三氏より廢娼建議を府會議長へ差出したり。

東京演說會　今日午后一時より淺草歐遊館に廢娼壯年義會發起の廢娼大演說あり同會の會員二名外に石坂龜二、星野光太、平岩恒保、加藤照及び巖本等の演說あり。夜七時半より築地福音教會に於て亦た巖本の演說あり。一昨日大谷教校に開きたる佛教演說中に土岐善靜氏は廢娼論を爲んと欲せば先づ佛教の不邪淫戒を受くべしの題にて演說あり。昨日は橫濱住吉町會堂に於て伴、古莊諸氏の演說あり。明夜は高輪台町にて伴巖本の演說あり。

廢娼壯年義會　同會は益々隆盛し目下殆んど二百名の會員あり去る廿五日は開花樓に於て懇親會を催ふし向后一層の運動に付計畫したり。

高知廢娼演說　縣會に於て二回可決し知事に於て尙ほ廢娼を認可せざる高知は廢娼論益々熾盛なり、過日廢娼演說を催ふし山崎竹、北村かすゑ、和田繁、瀨戶升喜(以上女子)田中雄熊、山本正心、安喜喜代香の諸氏演說したり。

鎭西廢娼會　福岡縣企救郡小倉町に開設され去十三日廢娼演說を催ふしたり。

名古屋　同地より左の如き報告來る、

過日來當地の基督教有志婦人の計畫中なりし廢娼會にては去る廿三日當地南久屋町の美以美教會堂に於て有賀武雄星野恵治小室重弘淸水平四郎の諸氏を聘して演說會を開かれし處生憎雨天にも係はらず多くの姉妹方は來集謹聽せられたり、又廿五日には吉川澤子淸水米子小室勝子服部邦子等の數婦人は有賀武雄氏の宅に集り種々協議の末左の數件を決せらる一南伊勢町星野恵治氏(代言人)の宅に假に事務所を置く事。

一有志婦人は毎週木曜土曜の兩度午前九時より事務所に集る事　一嶋田植木兩氏の廢娼演說巖本氏の妓樓全廢等の如き册子を購求して縣會議員其他成るべく多くの人に贈與する事。一廢娼趣意書と題する一篇の勸告文を印刷して汎く世間に配布する事。

當地の兄弟姉妹の中には右の擧を賛成して寄附金を申込るゝ方々も續々これあり又活版印刷を業とする一人の兄弟は勸告文一万枚の印刷費を寄附せんと申込れたり(雪の舍主人)

藝妓放逐　山梨縣東山梨郡の岡和一氏外四十餘名は去廿四日甲府市街より藝妓の住居を撤去したしとの趣意を縣會議長に宛て差出したり、加藤博士の論に呼應するものにて共に廢娼論の影響たり亦影響するもの也。

名古屋の福岡祐二郎氏　名古屋の廢娼熱心家なる同氏は全國廢娼建議を提げ柳本愛知縣書記官の添書を持ち去廿五日上京したり。

娼妓廢娼會に書を寄す　兵庫縣廢娼同盟會へ向け西村樓内潔白なる一女子として一書を送りたる由にて中に左の如き句あり、

：：此の廓に足を入るゝ殿達はたゞ無智の人とのみ限れず隨分智識もあり學問もあり名譽もある御方にて殊に妻子もある人十の五をしめ候次第まことに怪しからぬ事に候……

西京　京都府に於ては大澤基輔氏廢娼論に加擔し連りに其の運動を計畫せらる。

福井　福井に於ては去年末教會に於て建議成立ざりしと云へども其後引續き活潑に運動し廢娼論に盡力せらるゝもの多し其多數は基督教信徒なるが之に對し佛徒は存娼論を主張せり。

日本娼妓全廢會　新潟縣大宮貞之助、和歌山縣鎌田正七郎、福井縣吉田小四郎の三氏は福井市江戶下町に同上の會を設立したり其の規約は左の如し、

日本娼妓全廢會規則

第一條　目的　日本全國にある娼妓を全廢すること
第二條　期限　各府縣會に於て全廢を決するまで成立し置くものとす
第三條　方法　遊說して滿天下人民の賛成を得府縣會議員に勸告以て娼妓の全廢を議決せしむると
第四條　會員　本會の目的を全遂するまで運動を俱にするものを云ふ
第五條　特別員　本會の目的を賛成し多少の寄附金を出すものを云ふ
第六條　賛成員　本會の目的を賛成し以て補助するものを云ふ
第七條　寄附金　本會の目的を達する爲め全國に遊說するの旅費幷に雜費に充つるものとす
第八條　出納報告　寄附金額其姓名及び費用額明細を新聞紙上に時々報告す
第九條　本會景況　時々新聞紙上に報告す
第十條　位置　福井市江戶下町五十四番地とす

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

第十一條　支會　各府縣便宜の地に設置するものとす

第十二條　同盟　既に設置しある同主意の會に連絡を通ずるものとす

第十三條　處置　本會々員にして會名を汚す者あるときは退會を命ず

○廢娼論料

左は九年前万國廢娼會議委員十八名より我政府に向け呈送し來りたるもの丶譯文なり。

○寄日本政府諸公書

某等謹んで日本政府諸公閣下に書を呈し謹んで閣下の欧洲諸政府の爲せる所に倣ひ生等の微意に垂聽するの貴意を惠示せられんとを請ふ所あらんとす。

我聯合會の目的たる教諭の術と合法の道により各國に行はる丶所の法律教令制度にして苟も多少賣淫の業を公許し保庇するの幇助となるものを廢棄するとを謀るにあり。

願ふに凡て政府より公に賣淫を准允するの非なるは恰も夫の酔沈博奕を公許するの非なると更らに異ならず生等未だ嘗て盜業を默許するの政府あるを聞かざるなり政府既に賣淫の非を知り其醜風を矯正し又壓止せんと欲せば其當局者たるものは之に對する猶其盜業に對するが如く全く獨立無縁の位地に立て以て其事を謀らずんばあるべからず決して之を恕視すべからざるなり決して之を保庇すべからざるなり往昔佛蘭西第一世那勃翁以爲らく若し賣淫營業の地界を限りて之を地方に開店せしむるとなくんば以て其跡を絶つべしと乃ち遊廓の場所を貴國が芳原及其他の場所に限ると同一の方法を施し以て淫賣の醜業を壓止せんと欲せしも爾後の實驗と確例とに據て之を證するときは夫の公許を與けたる妓樓の增加するに随つて密に賣淫を營むもの益々多きを加ふるに至りしと云ふ是蓋し夫の專賣の制出で丶國に益々密賣の風興り關稅重く保護稅厚ければ世に彌々禁物を密賣し關制を破るの犯者多きと同樣の理ならん。

賣淫營業の地方を制限するの法意外の結果を來す夫れ斯の如し黴毒檢査の制も亦た同一の憾なきを保たず生等黴毒檢査の設ある地方の實況を察するに其貪淫に原するの悪病の蔓延を防禦するにあらずして反て之を培養するもの丶如く然り何となれば其病の最も猛威を逞ふするの區域は多くは黴毒檢査の制あるの地方に限れるを以てなり其故何ぞや夫の醜事を樂むの徒は檢査の制を以て全く悪病を治絶するに足りて其身体に病毒を受くるの患を除くの實援なりと信じ益々其樂に沈溺するの弊害あればなり。

賣淫公許の弊害斯の如く其れ大なり宜しく察せずんばあるべからず。

我聯合會は十年前初めて英國に設立する所の協會に始り爾後其勢を四方に延及し千八百七十五年三月に至り万國聯合會の體を組成し千八百七十七年に及んで初めて其第一回万國會議を瑞士國慈涅利府に開けり又た本年十月をトし第二回万國會議を伊多利慈諾亞府に集會せんとす我聯合會は十有五ヶ國人の集結する所なり若し貴國より其名代を我第二回万國會議に來會せしむるの舉あらば我聯合會員其は來會を待ち將さに厚意を以て接遇する所あらさんとす。

我聯合會の世人に質さんと欲するの問題は賣淫の惡習を絶ち就中政府より之を公許するの制を廢するに在り而して此事を論ずるものは我諸國中之に適するの地に位する學者と實地家を初とし政府の顯官、政事家、法官、大學教師、僧侶、經濟家、内外醫家、法學師、職工、及其主長にして熟議討論盡さゞる所なし。

慈涅和會議に於て我聯合會の會務を分つて五部となせり曰く衛生部、道德部、經濟部、婦女政治及救助部、法制部是なり各部其事務局を設置し屈勉其主務の事項を細考審査せり而して各部歸着する所の議決は皆な全く同一の論點に逢せり其議決諸條は慈涅和會議議決書中に詳かなり該議決書ハ第一に佛語を以て記し後ち獨逸、英吉利、丁抹、阿蘭陀、伊多利、西班牙、瑞典、日本の八語に翻譯せり此外我問題に付き種々の論說教書等にして我聯合會にて刊行するものあり又各國自己の語を以て我目的に係るの事項を論ずるの雜誌類を出版するあり其主要なるものを擧んに英國にゼ、シイルド（矛楯の義）ゼ、メディカル、エンジニヤル（衛生工學雜誌の義）ゼ、プロテスト（論辨書の義）ゼ、チツケジヨナル、ペーパル（不時出版雜誌の義）ゼ、ヲオルキンゲ、メンス、子ショナル、ジョルナル（全國職人組合日記の義）あり瑞士に每月雜誌ある佛語を以てしゼ、ブレタン、コンチ子ンタル（欧洲大陸報告書の義）と名く丁抹、阿蘭陀、瑞典には各其國語を以て刊行するの每月雜誌あり加之欧洲諸國刊行の政治及學術に係る新聞雜誌類にして我聯合會の目的を保護するもの少からざるなり。（未完）

○醜業の統計

或る友人此頃東京府の統計表を借覽して左の一表を作れりこれに由て觀る時は東京府下にては去る明治十二年より二十一年に至る十ヶ年間に貸座數及ひ引手茶屋は規則正しく減少したれども之に反して娼妓は年々增加せり（讀賣新聞）

年次	貸座數	引手茶屋	娼妓
明治十二年	四七八	二六一	二七五四
同十三年	四八四	二六一	二八四三
同十四年	四七八	二五九	三〇二一
同十五年	四三一	二五九	三〇二一
同十六年	三八四	二五九	三一五六
同十七年	三七五	二五九	三六〇〇
同十八年	三六九	二五八	三九九七
同十九年	三七七	二四七	四一四八
同二十年	三七九	一九九	四三三八
同廿一年	三七九	一八八	四七四六
十二年に對する廿一年の增減	減　九九	減　七三	增　一九九二

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

新誌

○長谷川泰氏　存娼論に不理至極なるもの少なからねど長谷川泰氏が此頃ろ衞生會に於て演説せられたるものと聞し非廢娼論の如きは吾人毫末も服する能わず、云く男女發情は天然にして婚姻にて滿足せしめ難き場合は職業實淫にて滿足せしむべしと然らば女子の爲に男娼を置くとも君は之を當然の事となす乎、云く公娼の害は懸事ならざるのみならず學生等の如きに取ては決して惑溺せざる限りは之に接して却て精神を爽快ならしむ買娼を惡事と云はゞ亦婚姻をも惡事と云はざる可らず何んとなれば婚姻して交接すると公娼に接するとの相違は只だ時と場所との相違のみと。嗚呼此に至つて德を破するの言も亦極まると云ふべし、如此き言辭が白日公行するに至るも士人尚ほ顧慮するに足らずとする乎、吾人が慨歎何ものか及かん。

○西洋の文明　西洋の文明は平民の需要より起り、我國の文明は貴族的の需要より來る、之れ大なる懸隔の始步點なり、然れども朝野子の如く、之によりて西洋は動物的の文明なり日本は精神的の文明なりと云ふに至ては豈に誤まるとなしとせんや、西洋人は韻致を好まず雪を見るも寒し五月蠅し是が雖なら金もふけと云ふのみ日本人の如く特に舟を出して雪見するの嗜好あらずと、嗚呼此れ彼國に於ては僅に中以下の人に交り此國に於ては多く上流人を見るが爲めの誤察のみ、直ちに解るとは詩歌の書の彼れ我れ如何に高潔韻麗なるやを見よ、而して其の實れ高の彼れ我れ如何に多少なるかを計れ、西洋の文明何んぞ必らず器械的物質的のみならんや、如此きは只だ數ヶ月其の外面開化を視察したるものゝ言ふべきとのみ。

○國語講義錄　其第一冊の發兌を見る、賀すべき事なり、吾人固より國語國文の大ひに進めざる可らざるを知る、然れども專門國文家往々躊躇して之に着手せず、よし着手するも多くは樹陰細話するの歎なきにあらざりしが、近日に至り其の公けに發表して旋辨大論するものゝ漸やくに增すを見るは喜ぶべきとと云ふべし。

○新聞社界花笑はんとす　何よりも婚しきは新聞紙社界に少々づゝ花の開き初めしとなり、善きものに於ては朝野新聞頓かに反り咲を爲す、今日よりは國民新聞、江湖新聞、兩々旗を擧げて大ひに打つて出んとす、共に目ざましくあらんと思ひて今より刮目し待つものなり。

○人民政府且つ切迫するを止めよ　時事新報は例の如く信切に勸告したり、今年は定めし切迫するもの多くあるべし、今より轉たゝ緩和劑を要めて止まざるなり、左れど其最大なる救治策は新聞紙の手にあり、新聞紙面の記事が政論にのみ偏重せざれば天下は常に大平なるべし。

女報

○豐田芙雄女史　歸朝歡迎會去廿五日紅葉館に於て催うさる濱尾、辻、吉原諸夫人、加藤きん、上野ぎん、鳩田よね、安井小糸、齋藤乙女諸女史發起となり來會者三十四名ありし由。

○產婆へ諭示　府下の產婆中產婆會へ入らざる者あるに付き東京府衞生課長は去る二十四日產婆十四名を集めて同會へ加入すべき旨懇々諭示したりと。

○鹿島英語學校女子部　佐賀縣下鹿島英語學校は昨年來教則等に改正を加へ愈々盛萬の授業を爲し居るが今回更に女子部を設けんとて同校員大野正利氏は熊本濟々黌女子部の規則及び實况を取調べられたる由なれば近々設立の運びに至るべしと。

○女學校生徒特遇を受く　大坂北區若松町の新築裁判所は去る廿一、廿二兩日を以て一般人民の縱覽を許したるが公立大坂女學校及び私立大坂梅花女學校等の教員也に生徒等は同日雜沓なりし爲め縱覽するを能はざりしものか特に廿三日を以て縱覽を許されたりと云ふ。

○名古屋清流女學校　は追々盛大に赴き目下在學生七十餘名に達したる由にて從來外國女教師三名、本邦男女教師四名にて授業せられしが今度昨年華族女學校を卒業せられたる黑川中將の息女黑川千森子を聘して和漢文學、習字等の教師と爲し一層校務を擴張せらるゝ由。

○淸水豐子の運動　目下京都に住む女權擴張論に熱心なる淸水豐子は京都に於て婦人團体を組織し自由主義の一團体を造んとて目下奔走中の由。

○名古屋の女學校　尾州名古屋市内に在る女學校は彰榮女學校紅楓女學校女學專門葵望舘淸流女學校の四校にて右女學校の校員諸氏は女學の改良前進を圖らん爲め每月一回相會して協議會を開くよし。

○藝妓放逐の協議　筑後久留米の青年諸氏は同市新町に在る藝妓を市の偏隅に退去せしめんとて夫々協議の上既に縣知事に請願したりと云ふ。

○女子講習會　茨城縣水戶上市島見町十二番地の菊池倭文子には東京女子職業學校の卒業生にて今度同會を設け和洋裁縫編物の二科を教授するよし。

週報

○宮庭　二十日皇帝陛下より電報を以て伊太利國皇弟薨去の吊詞御發送遊ばされたり●二十一日天皇陛下內閣へ臨御あらせらる●二十六日掌典岩倉具綱を孝明天皇御例祭及神宮祈年祭勅使として參向仰付けらる

○政治　二十一日內閣會議に各大臣參集せり同日內務省に於て警部長會議を開かる同日樞密院に於ても會議を開かる同日橫濱蔦座に於て改進黨の演說會あり●二十二日元老院に於て北海道及び町村制を施行せる島嶼の國稅徵集の件第二讀會及び水道條例第一讀會を開かる同日靑木外務大臣は同省の高等官一同を其官邸に招待し新任の饗宴を開きたり●二十三日司法省に於て法律取調會議を開かる●二十四日內閣會議に西鄉、山田、松方、大山、榎本、靑木各大臣は參集せり●二十日淺草鷗遊館に於て政談演說會あり●二十五日歐洲巡回中なりし陸軍中將小澤武雄氏歸朝せらる●二十七日元老院に於て水道條例公布案の第二讀會を開かる

○外交　二十一日獨、佛、米、墺、衛の各公使は英國公使舘に集會して協議を爲したり●二十五日陸奧公使歸朝せり

○文學　東京統計協會は二十一日總會を開き渡邊洪基氏を會長に石橋重朝氏を副會長に再撰せり●二十六日區部各小學校長は小石川區尋常師範學校に集會して協議會を開けり

○美術　日本美術協會の繪畫研究會は去る二十五日同會列品舘に於て新年第一會を開きたり

○銀行　二十日日本銀行は改革を行ひ川田同銀行總裁より諭達を發せられたり

○新誌　再興自由黨は東西新聞を引受け同黨の機關新聞に供せんと計り去る二十七日受取渡しを濟せたり

○雜報　二十一日鳩山和夫氏は代言免許狀を下附されたり●二十日伯子男三爵の人々上野櫻ヶ岡華族會舘に於て三爵聯合會を開けり●二十三日西京同志社校長新島襄氏沒す●二十四日府下の菓子商は菓稅の義に就き建白書を元老院へ奉呈せり

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす每科受持の教員孰れも熟達善良あり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

廣告

教育報知

每土曜日發行、一冊金五錢十冊前金四十五錢、二十冊前金八十五錢、郵稅一冊五厘一ヶ年分(凡五十二冊)特約金二圓

教育報知第百九十八號(本年初刊)ニハ有栖川宮熾仁親王殿下ノ石板摺ノ御肖像ヲ第百九十九號ニハ榎本文部大臣揮毫額面石版摺ヲ附錄トス尙逐號大家ノ學說論文及新報ノ外左ノ事項ヲ掲載ス

○教育學　伊澤修二先生述

每號ニキク版八頁ヲ別刷リ附錄トス

○心理學　國府寺文學士述

○手工科教授法　上原六四郎先生述

○慈氏倫理學　片岡珺光先生譯

○教授學　今泉祐善先生述

右ニ付續々御愛讀ヲ乞フ

東京市日本橋區本町二丁目三番地

東京教育社

國のもとゐ第二卷第十一號　明治[illegible]二月[illegible]

目錄

◎論說

○女生徒への注意(續き)　文學博士加藤弘之

○學びの山口(續き)　文學博士小中村清矩

○家內の純良　理學博士矢田部良吉

○定期試驗の見合

◎小說

○まつよ姫第二回山おろし　澁柿園主人

○Passion and Principle. 3. (Tall from the French.)

◎家事

○普通生理衛生論(續き)　T. S.

○家事經濟一斑(續き)　S. D.

◎文藝

○講堂掲示(續き)　丸尾錦作

○列女傳譯文ぬきほ(續き)　鈴木重嶺

○風の音(續き)　中村秋香

○アリス內親王の傳　シーカルクス

○北遊記(續き)　鐵腦生

◎雜纂

○福引の趣向書○御茶の飮み分け○十四と云ふ數○濠洲の奇鳥○極微○氷宮○人形の眼○奇猫人の生命を救ふ○近詠數首○歐羅巴の强國○雷電及ひ雷光○火山の爆發○中央亞細亞の地○簡單なる西洋料理の献立○酒の腐れを防ぐ法○地理里の解○温故知新談○啞生發育用字の寄附○北米合衆國の郵便線路○精理學舍○中村氏の詠歌○日本沿革地圖○始業式の演說○歲暮唱歌譜○地理總論○書狀の認め方

○本誌定價一冊八錢郵稅五厘○六冊前金郵稅共四十八錢○十二冊前金郵稅共九十一錢

東京日本橋區馬喰町二丁目一番地

興文社

通信女學 講義錄 第一卷

價金三十二錢　全國一般無遞送料

麴町區富士見町二丁目一番地

女學雜誌社

少年園

少年園は少年世界の鍾愛兒なり、未だ世に競爭者を得ざる特權の君王なり、橫行の將軍あり。號を重ぬる既に三十有一、其一を加ふる每に園友を增すの多きは、猶ほ少年園の草木が日に繁茂し、綠林鬱蒼紅花爛熳の美を添へるが如し。今や實に我が園友は一萬八千の上に出で、少年園の地盤は牢固を極め、少年園の林泉は風致漸く雅趣を呈し、苔色青く水聲淸く、其名は既に蝦夷熊襲の天より琉球夜光の海に至るまで偏く人の知る所となれり。是れ一に愛顧諸君少年諸君の賜にして、園主の深く諸君に謝する所なり。嗚呼何を以て謝すべきや、我等は唯是より更に園地を開拓し、新たに奇草珍卉を移植し、老園丁を呼び巧橐駝を聘し、少年園の美をして一層の天眞を發揮し、一層造化の妙を得しめ、日本固有の園藝に西洋斬新の肥料を施し、終に少年園をして少年諸君の一大樂土たらしむるに在るを知るのみ。少年園は益々勉勵して事に從ふべし、少年園は愈々改良して步を進むべし。少年園の噴泉は實に甘露泉なり、少年園の樹林は實に蜜果を結ぶ仙林なり。世の少年諸君來り遊べよ、益々愛顧の步を枉げよ。

東京府下北豐島郡上駒込村山縣悌三郎邸內

少年園

一本誌は中學校及高等小學校生徒の學力に相應せる文藝學術上の事柄を採錄し、娛樂と利益とを兼ね與ふるものとす。一、本誌は務めて文字を平易にし、文章を流暢にし、間々假名を附け、精密美麗なる圖畫を插み、以て讀み易く解し易からしむ可し。一、本誌は每月三日、十八日の二回に發兌すべし。一、本誌は一冊定價金五錢、十二冊(半ヶ年)前金五十五錢、廿四冊(一ヶ年)前金壹圓とす、東京市外は別に一冊金五厘宛の遞送料を要す。一、本誌は前金にあらざれば發送せず爲替向け所は本郷郵便局とす。一、本誌第一卷(自第一號至第十二號)第二卷(自第十三號至第廿四號)合本は、洋裝金字入の美本にして、定價金五拾錢遞送料金拾錢とす

成立學舍 女子部生徒臨時募集

本部ハ德育ヲ主トシ專ラ左ノ學科ヲ敎授シ來リシ處今般此主義ヲ擴張シ益本邦女子ニ適切ナル敎育ヲ授ケントス入學志願ノ者ハ二月十日迄ニ申込ムベシ

學科 修身、禮式、和、漢、英文、數、物理、化學、地理、歷史、家政、經濟、衛生、論、心、理、和洋(裁縫、圖書、音樂、割烹)編物、茶、花、等

東京駿河臺袋町九番地

私立 成立學舍女子部

眞理

第四號 每月一回二十日發行 一月二十日發兌

目錄

眞理●政治熱をして宗教世界と冷殺せしむる勿れ●ダルウヰン學說と哲學的終局論の關係●奇蹟論●福音書評論の法如何◎雜誌●小日向切支丹屋敷及び岡本三右衛門墓の事(密圖入)●聾の母親(第三)●女房の不經濟◎文園●數件◎雜報●內外報數十件◎定價一冊八錢半年前金四十錢一年全八十錢郵券代用一割增●無遞送料●見本五厘切手十七枚

發行所 東京駿河臺 世光社

明治二十三年一月卅一日印刷
明治二十三年二月一日出版

發行所 東京麴町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

遞信省認可